

—本田の死—

し前に本田の家に着きたいと思つたので。

汽車は可なり込んでゐたが、私達は片隅に集つて座席を占めることが出来た。緑の濃い木立や廣く打ち開けた田畑が、窓越しに私達の顔を掠めて過ぎた。それから早朝の爽かな空氣が、車窓から流れ込んで、袖口から懷の中に吹き込んだ。然し私達は妙に黙つてゐた。平素無駄口をよく利くKまでが、眞面目くさつた顔をしてゐた。Kの眞面目な顔は一時間と續かない、とは私の平素からの信念であつた。私のさふいふ考へをKは私の表情のうちに讀んだかどうか知らないが、突然私の方へ向き直つた。

「おい。本田は誰れと一番深く交際してゐたらうかね。」

「さあ。」

「本田には好惡の感といふものが無かつたのかも知れない。あゝいふのは司法官になるといふね。勿論あのまゝでは判決は下されさうもないがね。トルストイにイ

ワンの馬鹿といふ小話があるだらう。イワン王國の司法官には最も適任だらう。」

「すると君は小惡魔のうちの司法官といふ格だね。」

「馬鹿。僕は地面の中に小さい穴を掘つてはいりはしない。まあ天上にかけ上げるね。」

「結局どちらでも同じぢやないか。」

「何が？……あゝさうか。天國に到ると墓の中に埋るとか。」さう云ひながらKは何か名句をひねり出さうとでもするやうに、一寸視線を遠くに定めたが、突然聲を低めてかう云つた。「本田も惜しいことをしたね。」

その言葉が餘りに突然だつたので、Sがふり向いてKの顔を見た。それで三人の間にまた本田の死といふことがぶら下つた。

本田の死はもうはつきりした事實でありながら、それがどうもびたりと實感に來なかつた。その間の空虛のうちに心があちらこちらに揺らめいた。それに事實

—本田の死—

がまざく／＼と迫つて来る。三人共妙に白け切つた顔付をしてゐた。

「かうなるんだつたら、一層本田の云ふまゝにさせておいた方がよかつたかも知れないね。」とSは私の方へ話しかけた。

私もそのことを考へてゐた。然し果して何れがよかつたのかそれは答へられる問題ではなかつた。

「何のことだ？」とKがきいた。

私とSとは顔を見合つた。が結局、Sがごく簡単にその話をKにしてきかした。

それは私とSと二人で、本田が故郷の近くのN市の病院にはいつてゐるのを見舞つた時の話である。

一ヶ月ほど以前に私はSと一緒にN市の病院に本田を見舞つた。

本田は白い寢臺の上に仰向に寝てゐた。南北に連つた棟の一室で、西に廊下があり東に窓があつた。窓の外の中庭には砂地に松が聳えて蔭を作つてゐたが、その向ふの棟の瓦屋根の照り返しを受けて、病室の中は物が透いて見えるほどに明るかつた。

私達がいいつてゆくと本田はかすかに微笑を頬の上に漂はした。

「やあ、」と彼は云つた。その聲はいつもの彼と少しも調子が變つてゐなかつた。その次に彼は何か云はうとして口元を動かしたが、聲は出なかつた。そして彼はぐつと口の中の唾液を呑み込んだ。

私とSとは彼の枕頭の窓際に凭れて、何かと慰安の言葉を發した。彼はそれをちつと聞いてゐた。そして言葉の終りに屹度眼を擧げて私達の顔を見た。私達はその眼の前に口を噤んでしまはねばならなかつた。

穏かな光りに濡つて澄んでゐた彼の眼は、私達を驚かしたほど大きく深く開か

れてゐた。その表に一抹の濁つた曇りが掛つてゐたが、その底には鋭い露はな光りが在つた。彼の眼のすぐ前に在る凡てがその一抹の曇翳に映じて、それを底の方から來る鋭い光りが輝らしてゐた。其處で凡てが空なるものに消え去つたであらう。そして只一つのものが嚴かに残つたであらう。それは恐らく生でも死でもなく、彼の自己そのものではなかつたか。

と云ふのは、暫く彼を一人安靜に残さんがためにやがてその病室を出て、隣りの控室にはいつた時、私達はそれにぶつかつたのであつたから。

其處には本田の父とN市に住む本田の叔父とが居た。そして私達は本田の親友として或る重大なる相談を受けた。

—醫師の言に依ると、本田の病氣は初め肋膜で次に腹膜を併發したのであつた。そして目下肋膜の方が病勢が進んで、水が餘程たまつてゐる。そのまゝにしておけば腹膜の方も益々危険に陥る。その上心臓が危い。で手術をして肋膜の水

を今のうちに取る必要がある。然しそれには、ひどい衰弱と腹膜の方とがある。或る危険は豫想しなければならぬ。かと云つて今のまゝでは肋膜の水が益々増す恐れがあるし、さうすれば結果は猶更悪い。……その困難な情況を醫師は彼の父と叔父と三人で商議して、遂に手術をすることになつた。所が何時しか本田はそのことを聞き知つたらしい。そして、「死は覺悟してゐるので手術はしないでくれ」と叔父に頼んだ。

「實際どうしていゝか分らなくて困り切つてゐますので、一つあなた方の御意見を伺ひたいと思ひまして。」と叔父さんは低い聲で私達に云つた。

私とSとはたゞちつと顔を見合つた。そして、さういふ相談をせられたことよりも、本田の心が直接に私達の心に迫つて來た。

凡てのことに容易く撓む性情を有し、生について意力と慾望とを極めて少く有してゐたらしい本田が、危急な病床に在つて最後に投げたその要求は、彼にとつ

て重大なことであつたに違ひない。彼は常にあらゆる人に好意を持ち、あらゆる人に對して人そのものを慈むの情に厚かつた。それが今は自己を自ら慈んでゐるのではないか。

手術を以て偶然を僥倖するのだとすれば、自然のなりゆきに任せることは自然を僥倖することであつた。もしその僥倖が當ればそれでいゝだらう。然しもし不幸な結果に終る時には、必ずや一方は痛ましい悔いになるに違ひない。それでは結局は、醫師の見込みと本田の意志とを秤はかりにかけるのみであつた。而も醫師の見込みは本田の運命に關する唯一の信頼であり、本田の意志は本田の自己に關する唯一の問題であつた。

脹れてぼん／＼と音のしさうな本田の腹部と困難な苦しさうな呼吸と窶れた青白い顔と、それからあの鋭い露はな眼の光りと、その二つが私の眼の前へ据ゑられた。

「何れにしたものでせうかな。」と叔父さんはまた云つた。

「肋膜の水を取ると云つても、たゞ管を差入れるだけで、大した手術ではないんでせう。」とSは云つた。

「さうでせうが、何しろ場所が場所だけに、たとひ麻酔をさした所でよほど苦しむんださうですからな。」

「それではやはり本田君の云ふまゝにさしたらどうでせうか。」と私は云つた。

「えい、それが最もいゝ方法でせうが、それでは却つて生命が危険ださうですから。」

私達はいつまでたつても結局同じ所をぐる／＼廻るのみであつた。そして長い沈黙が続いた。沈黙のうちには只不安が醸さるゝのみであつた。

「私達はたゞ本田君の恢復を祈るのみですから。」と私は云つた。その時の心にそぐはないその言葉を發するの外はなかつたのだ。そして私は本田の父の方へ向い

—本田の死—

て云つた。「先づあなたの御意見は?……」

先刻から黙つて控へてゐた實直な人のようさうな彼は、その時驚いたやうに顔を上げた。その日に焼けた中老の顔の表情に、私は一寸息をつめた。惨酷であつたのだ。何か、凡ての動きが、惨酷であつたのだ。

「私はたゞ彼の命さへ助かれれば、どうでも宜しいので。」と彼は云つた。

直接に投げられたその言葉が、皆の心をぐいと一つの點に集中させた。

叔父さんはすぐに院長の所へ出かけて行つた。そして暫くしてやはり前と同じ報告を齎した。それから、叔父の後について來た院長は、やはり手術をする外はあるまいといふことを新たに皆の前で云つた。ひどい麻酔は出來ないが、苦痛が激しいやうなことはしないさうであつた。

「あなた方から一つ本人の意向をそれとなく聞いて頂けませんでせうか。」と叔父さんは云つた。

それで私達はすぐに本田の病室の方へ出て行つた。

やはり手術に頼るの外はなかつたのである、否恐らくはもう初めからさう定つてゐたのかも知れない。私達の心がぐる／＼と二つの問題の間を回轉してゐる間に、否その初めからして、もう歸結する所は定つてゐたのであらう。それは誰の意志でもなかつた。さう風が吹いたのだ。

ぱつちり見開いて私達を眺めた本田の眼を、私は見返すことが出來なかつた。

窓際には種々な名の知れない草花の鉢が幾つも置いてあつた。私とSとは云ひ合したやうにその鉢の所へ行つて匂ひを臭いだ。これにも何の香りもなかつた。

「匂ひのもしない花ばかりだね。」と私はSに云つた。

その時看護婦が私の方へ沒表情な顔を向けて云つた。

「本田さんは花の匂ひが嫌ひだと仰言るものですから。」

その不満らしい言葉のすぐ後に本田が穩かな調子で云つた。

「病氣が重くなつてから、僕は、花の香りが、嫌ひになつた。神経が、衰弱してゐるんで、その刺戟に、堪へないのだね。」

私とSとはその時窓際を離れて、彼の寢臺の側に並べてあつた椅子に腰をかかけた。静に時が過ぎていつた。病室の中には一種の甘澁いやうな薬の匂ひが漂つてゐたが、それだけには本田の神経も馴れきつてゐたのであらう。そしてその中に浸りながらたゞ安靜をのみ求めてゐたのであらう。

然し私の頭の中には先刻の問題がぶら下つて、ぐる／＼渦を巻いてゐた。時々私の方へ向けられる本田の視線に私は堪へられぬ思ひをした。そして私はさうしてゐるのが苦しくなつて來た。

「君は肋膜の水を取らなければならぬさうぢやないか。」と私は云つた。餘りに早急な言葉だつたが、どうすることも出来なかつたのである。

「あゝ。」と彼の答へは案外落ち付いてゐた。

「それでは早くした方がよくはないかね。早い方が恢復も早いだらうから。」

本田はたゞ黙つて首肯した。そして眼のやり場に困るやうな風で、視線をちらつかしたが、やがてちつと天井の片隅を見つめた。そして暫くして彼の方から口を開いた。

「僕は實際、呼吸が、苦しい時がある。然し、同じことなら、手術をしないで、このまゝの苦しみの方が、安らかなやうな、氣がするよ。到底、助かりさうもないからね。……然し、手術をした方が、いいだらうか？」

私達が黙つてゐるので、本田はその大きい眼を私達の方にぐるりと向けた。で引きつけられるやうに眼を見返すと、その眼は慌てたやうに閉ぢられてしまつた。眼を閉ぢた彼の顔は石膏の死面のやうであつた。

「手術を、した方が、いゝかしら。父や叔父は、さう云ふんだが……。」
本田の低い聲がまた響いた。

「皆はたゞ君の恢復をばかり望んでゐるんだから、」とSはその時云つた。「出来るだけ早く癒る方法は講じた方がいゝだらう。君のためにもその方がよかないかしら。」

「さうだね。……では手術を、して貰ふことに、しゝうか。」

「あゝさうし給へ。」と私は云つた。

その時、本田の眼が再び閉ぢられた時、私は布團の外に投げ出されたやうにしてゐる彼の細い手の指を見た。爪が白く透き通つてゐた。私はその手をそつと握つた。すると本田はまた眼を靜に見開いて私の眼を覗き込んだ。

「もう試験前で、君達は、忙しいんだらうね。」

「いやまだ隙だよ。」と私は答へた。

私の答へはそのまゝに眞實であつたが、本田の問ひは單にその答へを求めたのではなくつたに違ひない。彼はそのまゝ口を噤んでしまつた。そして私達も黙つ

てしまつた。それに觸れるのが堪へ難かつたのである、四五日位は。手術後の本田が少し落付くまで位は、その地に留つてゐられないこともなかつたのであるが、それが實際は出来なかつたのである。なせ？を許さないことだつた。留れば留つてをれるのを、心で濟まなく思ひながらも、私達はすぐ歸ることにした。

私とSとは夕方まで本田の側についてゐて、それからまた東京に歸つた。彼の父と叔父とは私達の來訪の効果(?)について心からの禮を述べた。手術は病人の容態を見て明日にも行はれることになつた。私達が別れを告げる時に、本田は眼を見開いたまゝ黙つて私達にその瘦せた手を差出した。その時私達は彼の顔から眼を外らした。

問題はわけもなくいつとはなしに解決されたが、それだけに一層の強さで私達の心のうちに迫つて來た。私達は汽車の中を殆んど沈黙のうちに過した。そして残された本田の心のうちにも、二つの問題が一層の強さで迫つてきたであらう。

—本田の死—

もしくは、凡てがたゞちつと落ち付いて安らかになつたであらう。
それから一ヶ月ばかりして本田は死んだ。

私達がHコラチの小驛に着いたのは正午少し前であつた。で驛前の一寸した家で晝食を済し、冷たい水で顔を洗つた。

やがて其處を出て町外れまで来た時、私達は一寸木蔭に足を止めた。暑い日が一面に野の上を降り濺いでゐた。眼をやると、眼の中がざら／＼した。その中を白い一筋の街道が真直に續いてゐた。それを私達は一里ばかり進まなければならなかつた。

然し、いつも真先に乗物を云ひ出して歩くのを嫌ひであつたSが、その時は先に立つてすた／＼歩き出した。で私とKとは仕方なしにその後について行つた。

本田の家の板が街道から見えた時に、私達は初めて息をついた。然し背中は汗ばんで、足袋には白く埃がかゝつてゐた。

本田の家の門をはいると、私達の姿を見てわざ／＼出迎へてくれたのかどうか、病院で私とSとが見識つてゐるN市の叔父さんが、私達を玄關に迎へてくれた。

それから私達はすぐに家の中の混雜に巻き込まれてしまつた。本田の両親と二人の伯父と弟とに私達は挨拶をした。そして坐敷に導かれた。十疊の方の奥に齋壇が拵へてあつて、屏風がそのまはりに立てられてゐた。私達は、美しい山百合の花や柴の葉を見た。それから白木の位牌と、その側に立てゝある大學の制服を着た本田の小形の寫眞をも見た。いゝ香りの線香の煙を嗅いだ。それらの前に首を垂れて手を合した時、私達の心はたゞ空しくぼんやりしてしまつてゐた。

やがてN市の叔父さんは私達を二階の一室に導いてくれた。隣りの室には女の衣類が取り散らかされてゐた。

—本田の死—

二階の室にはつとして腰を下すと、私達の心は夢から覺めたやうな氣持ちになつた。

「遠い所をわざ／＼おいで下すつて本田もさぞ喜ぶことでせう。」と叔父さんは云つた。

その時になつて初めて、私の頭に本田の死といふことがはつきり映つてきた。そして先刻ちらと眼にとめた本田の寫眞が、眼の中にまざ／＼と甦つてきた。それが、かの夢の中から浮き出して來た本田の姿とびたりと重つてしまつた。そして本田といふものが私の記憶のうちでいつのまにか過去の方へ追ひやられてしまつてゐた。それはもうどうすることも出来なかつた。

暫くして一人の年若い女が私達の所へ茶を運んできた。私はすぐにそれが本田の許婚の女であることを直覺した。ちらと見た顔の印象が、私の想像の通りであつた。眼を赤く泣きはらしてゐるらしかつた。たゞ私の想像では、彼女は背の低

い方であつたが、實際の彼女は背が高かつた。そして咄嗟の間にそれだけのことにながついたことを、私は自分でも妙に不思議に感じた。實際それは、その時の私の心の調子にそぐはなかつたのである。

叔父さんは私達の所を離れなかつた。階下の種々な用務は家の人達と他の親戚の人達とが辨じてゐるらしかつた。そして、肥つて悠然としてゐるその叔父さんは、葬式が出るまでの時間をちつとして過すために、私達をいゝ口實にしたらしかつた。

叔父さんは、本田の臨終の様子を私達に話してきかした。

本田はおとなしく手術を受けた。容態が許す限りの麻酔はせられたが、それでも多少の苦痛は感じたらしい。彼はちつと眼をつぶつて押へられた手足をびく／＼震はながら、その苦痛を黙つて堪へた。

手術後の経過は良好だつた。呼吸が和らいで、大分元氣付いたらしかつた。

— 本田の死 —

所が手術後二十日許りして、或る夕方、彼は不意に寢床から起き上らうとした。傍についてゐた看護婦が驚いてそれを止めやうとした。その瞬間に彼は胃の中のものを全部嘔吐してしまつた。それから翌日の夕方まで、一滴の飲料をも取らなかつた。そしてその晩から四十度に上る高熱に襲はれた。

翌日から彼はまた些少の滋養分を取り、気分もいくらか落ち付いたらしかつた。然し依然として熱は去らなかつた。醫師は首を傾けた。胃腸にも別に故障は認められず、肋膜も腹膜も大して病が進んだとも認められなかつた。高熱の出所が不明であつた。然しその熱は心臓を侵す恐れがあつた。投薬は重に心臓に向つてなされた。

種々の手當が爲されたが、容態は依然として同じ状態を持續した。その頃、もう彼の身體には全部破綻が生じてゐたのである。そして各器管の統一が破れてゐたのである。醫師はN市の叔父をひそかに傍に呼んで、前から全身に見えてゐた

水氣が、あなうち 臍にも多くまはつて來たことを知らした。

丁度一週間許りの後の或日、彼は朝から大變氣分がいと云つた。意識も非常にはつきりしたらしかつた。傍についてゐる人達に種々なることを話した。東京の生活について、今迄無口な彼れが嘗て話さなかつたやうなことが幾つも話された。また幼い時のことなども話された。そしてそれらのことは皆彼の過去の話であつて、彼は未來については丸で忘れてしまつてゐるらしかつた。そしてまた、傍の人達にも種々な話をするやうに求めた。で人々は彼がその主人公であつた思ひ出の話をいくつもしてきかした。彼等の話も皆云ひ合したやうに過去の話ばかりであつた。その時、その室のうちとその人々の心のうちとは、たゞ過去だけが生きてゐた。未來は、意識の及ばない遠くに置き忘られてゐた。誰もそれを別に不思議とも思つてゐなかつた。

午後の三時頃に、彼は自分の饒舌と人々の話とに疲れ切つたやうに、ふと口を

噤んでしまった。誰が言葉をかけても返事をしなかつた。不安な沈黙のうちに病室の中は急に静まり返つた。

それから彼に嗜眠の状態が襲つた。

その日の夜半に、彼は大きく眼を見開いて、人々を皆傍に呼んだ。そして一人その顔をちつと眺めた。それから天井から、下つてゐる電燈の光りを睥むやうにしてゐたが、「私が知つてる者を皆呼んでくれ、」と云つた。

「皆呼んであげるから、安心しておいで。」とN市の叔父が答へた。他の者は皆黙つてゐた。

彼はまた静に眼を閉ぢた。それから二時間ばかり後、彼は何やら大聲に饒舌り出した。眼をぼんやり空間に定めたまゝ、意味の分らぬ音聲が続けざまに彼の口から流れ出た。多少英語の素養のあるN市の叔父には、彼が饒舌つてゐることを英語だと分つた。然し勿論その意味は取れなかつた。たゞLove ^{ラブ} といふ語とLife ^{ライフ} とい

ふ語とが屢々くりかへされるのを叔父はきき取つた。

熱がひどく脳を侵しはしないかを醫師は心配した。然し彼のその斷續した謔言も、夜が明けると共に止んだ。

脈搏と呼吸と熱とが激しく不規則な状態を示した。病床の枕頭に掛つてゐる表のうち、三色の線が刻々に激しく高低して交差した。そして時々、昏睡の状態が彼を襲つた。

三日の間、壊れかけた肉體に對する執拗な生命の戦があつた。人々はたゞ息をつめてそれを見守るの外は無かつた。親戚の重なる人達がかけつけて來た。

三日目の夜の十一時頃、彼は眼をつぶつて昏睡に陥つたまゝ、はつきりした調子で、「早く！」と云つた。人々が驚いてその方に首を傾けると、また「早く！」と彼は云つた。そしてそのままに病室のうちはいんとしてしまつた。誰にもその早くの意味が分らなかつた。

その日の朝から三度注射が行はれてゐた。そしてもはや如何ともすべからざる容態になつてゐた。醫者は最後にも一度注射を試みた。然し反應は殆んど無かつた。

誰にも解き難い「早く」から、四時間ばかり靜平な状態が續いた。その時間の終り頃から、彼の額にはねとくした粘り氣のある汗がにじんでゐた。そして最期の痙攣が來た。

N市の叔父は、彼が早くとい言葉を發した時から、その右手を取つて刻々に變りゆく彼の手頸の脈を指先で計つてゐた。その右手の五指は初めからしつかり握りしめられてゐた。叔父はそれを開かせようとしたが、中々開かなかつた。痙攣が來た時に、その手は益々固く握りしめられた。そして叔父が、指先に殆んど脈搏を感じなくなつたと思つた時に、その手は自然に開かれた。叔父は心にはつと思つた。

本田はその夜の明け方に死んだ。

二階の軒先に大きい女郎蜘蛛が巢をかけてゐた。蜘蛛は巢の真中にとまつてちつと身動きもしなかつた。背中と腹部とに金色に光る縞がはいつてゐた。

私はN市の叔父さんの話をきしながら、蜘蛛の金色の縞をちつと見てゐた。話が終つてからも、私はなせかその蜘蛛から眼を離せなかつた。

三時頃に私達は階下の齋場に導かれた。十疊と八疊との座敷を、間の襖を取り拂つて、齋場にあてられてゐた。そして其處で拂式が營まれて、村の向ふの山腹にある墓地にすぐ埋葬せらるゝのであつた。

座敷の中には多くの會葬者が坐つてゐた。私達はその間にわり込んだ。一人の主僧と二人の客僧とで長い讀經が初められた。一座はしいんとして、たゞ讀經の

ゆるやかな聲と、時々それに交る木魚と磬との音が、皆の上を流れて、皆の心を杳かなものの中に誘ひ込んでいった。庭の木立から蟬の鳴く聲が聞えてきて、儂い夢のやうな皆の氣分をぢつと押へつけた。

老人達の口から時々低く六字の名號みやうがうがこなへられた。浄土宗の静かな佛式は、死者の思ひ出を安らかにし、生ける人々の心をしめやかな愁ひのうちに浸した。そして法悦の静けさと人々の悲しみとが一つに融け合つて流れた。

私の心のうちに、穏かな夢が醸されてきた。私は眼を舉げて、白木の位牌とその側の寫眞とを眺めた。本田の姿が遠くに、心の届く限りの遠くに、立つてゐた。するとその静かな夢のうちに、先刻N市の叔父さんから聞いた早くといふ本田の言葉が、釘のやうに打ち込まれた。その謎のやうな一點を中心として、夢がぐるぐると廻轉した。がそれはやがてかの大きな女郎蜘蛛となつて私の前に靜に懸つた。……私はその時、佛壇の前に幾つとももされてる蠟燭の火を見てゐた。晝の

光りのうちに、それは如何にも淡々しかつた。

讀續がすむと、すぐに墓地へ向つて長い行列が続いた。私達は會葬者の間に交つて、棺の前後に連る種々な指物を見送つた。藁の炬火と、親戚の女達に引かれた白木綿の綱と、蛇の形をした紙の指物とが、私の頭にはつきり刻みつけられた。そして私達は行列の後の方について行つた。

大勢の村人が道の兩側に立つて行列を見送てゐた。そして見馴れない私達の姿をじろ／＼眺めた。私は自分の頬にその大勢の視線を感じて、顔を下にうつむけながら歩いた。

思つたよりも墓地までの道は近かつた。墓地の入口には、畜生道、餓鬼道などと、順次に六道の札が立つてゐた。

棺に向つて短い祈禱が爲された。それから、裸の墓堀りによつて棺は深い／＼穴の中に入れられた。その後で種々なものが投げ込まれた。

喪主である本田の弟が一掴みの土を穴の中に投じた。それから大勢の人が交る代るに涙と共に土を投じた。そして最後に、墓掘りの鍬によつてどさりと土が棺の上に落つる音がした。本田の遺骨が棺の中に在る……。

啜泣く女の聲がした。そして私の眼からも涙が出て来た。人々は顔を蔽つた。

惨酷に、さうだ惨酷に、何か私の心の中でぶつりと断ち切られた。私の前には、どうすることも出来ない眞黒な土と、深い穴とがあつた。埋められるのはもう本田ではない。私の心の中の何かだ。それが生きながら、生々しい傷口を見せてゐる。啜泣く誰かの泣聲が、女の泣聲が、私のその傷口にちり／＼と迫つてくる。

その間に、土はどさり／＼と墓掘りの男の手で穴の中に投じられた。杉の木立に日没の明るみが遮られて、焚火の光がばつと赤く燃えてゐた。

労働者の子

千太——といふのは綽名である。嘗て馬肉屋のあかが雪駄を一つ何處からか街へて来てふざけてゐるのを見て、犬の口から雪駄を取り上げてみると、田中の旦那のものらしかつたので、わざ／＼届けると、五十錢銀貨を一つ貰つた。銀貨はすぐに母親の手に奪はれた、といふよりも寧ろ母親にくれてやつたが、彼はその話を何度も悪童仲間に聞かして誇つてゐたので、いつのまにか「せつたの正太郎」と云はれるやうになり、それが轉じて千太となつた。この頃では、家の中でも千太と呼ばれてゐた。彼はそれを別に厭がりもしなかつた。綽名は一種の高名な肩書である。——千太は、母親が機嫌を損じてるのを見た。母親は麻つなぎをやつてゐたが、ふと陰鬱にしかめた眉根を上げて、芋粥の残りの薩摩芋の切端を、室の隅で噛つてゐたみよ子を見付け、麻糸の毬まきを投げ出して、怒鳴つた。

「何をしてゐるんだい。食ふことばかりに氣を配つてさ、おたふくめが。父親でも呼んでおいで。」

みよ子は手から薩摩芋の切端を落しながら、飛び上つた。そして黙つて表の方へ出て行かうとした。

「音吉の家だよ、たしか。居なかつたらよく聞いておいで。」と母親はその後ろから呼びかけた。それから續けて呟いた。「何をしてゐるんだらう。身體が悪いと云つちやあ仕事を休んで、酒を飲んでぐずつてばかり居てさ。家の者をどうするつもりかね。」それから彼女は千太の方を向いた。「お前は麻つなぎをおし！」

母親が臺所に行つて手荒く何か用をしてゐる間、千太は母の代りに麻つなぎをやつた。外はまだ明るいのが煤けた障子越しに感じられたが、室の中にはもう十燭の電燈が一つぼんやりともつてゐた。

千太はいゝ加減に麻糸をつなぎながら、母親の方をじろ／＼見やつた。彼女は、

赤茶けた髪を無雑作に束ねた頭をふり動かして、鍋や皿を手荒く取扱つたり、わざと大きい音をさして揚板を動かしたりしてゐた。生活の難澁に疲れあぐんだ彼女は、はじめ人間に向けてゐた焦ら立ちを、後には食器や器具や自然に向けるやうになつてゐた。千太は母親のさういふ荒々しい様子を見ながら、過ぎ去つたことを思ひ出した。——二錢銅貨を二つ持つて砂糖を買ひに行くと、五錢以上でなければと断られ、こはく戻つて来た。然し母親はそれを聞いて、別に砂糖屋を呪ふでもなく、千太を叱るでもなく、たゞ千太の手から銅貨を引つたくつて、畳の上に投げつけ、その上を踏みつけながら銅貨を罵つた。——常から左足の膝が痛むといつて父親は仕事を休みがちであつたが、或る雨の降る朝、彼は公然と一日休養することが出来、皆は十一時頃まで戸を閉めて寝てゐた。所が起き上つてみると、空はからりと晴れてゐた。母親は表に飛び出して、空に向つて唾を吐かんばかりの勢で天氣を呪ひ出した。——其他種々。——千太は今、さういふことを思ひ出し、母親の様子を目のあたりに眺めて、母親は馬鹿だなど思つた。

やがて表から重い足音と小さな足音とがして、父親とみよ子とが歸つて来た。父親は酒に酔つてゐた。彼はどしりと一つ大きな足音をさして上つて來、そのまゝ畳の上にねそべつてしまつた。母親は臺所から濡れ手のまゝ出て來て、彼の方をじろりと眺め、それから、室の隅に立つてゐたみよ子の方を向いた。

「やはり音吉の家だつたらう。私が云つた通りだあね。」

云ひすてたまゝ彼女はまた臺所へ行つた。

父親は暫く、千太が麻糸をつなぐ手許を黙つて見てゐたが、次にぐるりと仰向けになつて、天井板を見守つた。それから一つ大きく息をして、臺所の方へ呼びかけた。

「おい、飯はまだか。」

—労働者の子—

答へはなかつた。

それから暫くして、母親は室の真中に一方の角が缺けた餉臺を持ち出した。上には、芋粥の鍋と、漬菜のはいつた鉢と、茶碗が四つと、小皿とが載つてゐた。

「おあがり。」と彼女は誰にともなく云つた。

皆は餉臺の周圍に集つた。

父親は粥をすくりながら云つた。

「今日はな、いゝ話があるんだ。音吉の奴がね、俺を會社に世話しやうといふんだ。何と云つたつけない、……何でも餘り大きくはねえが、樂な會社ださうだ。ちつと腰掛けてゝ出来る仕事だといふせ。此度職工を募集してるといふ話を聞き込んだといふから、俺と一緒にそつちへ行つてみやうてんだ。腰掛けて出来る仕事なら骨は折れねえからな。それに月々きまつていくらとはいるんだ。水道課よりやあよほどいゝや。雨が降りやあふいになつちまふし、炎天に堅え土を掘りくり返

すんだからな。第一癩に障らあ。俺達が汗水たらして仕事をしてると、白粉をつけた娘つ兒共が日傘をさして見物するんだからな。穴の中で働いてると、折角の土をふみ固めて頭の上から覗き込みやがる。人が膝つ節の痛むのも知らねえで、監督は横柄な顔をして怒鳴りやがる。」

「だつて、」と母親は云つた、「仕方がないぢやないか。食は……。」

「分つてる。」と父親はその言葉を遮つた。「食はなきやならねえといふんだらう。二言めにはそれだ。そんなに食ひたけりやあ、穀象蟲にでも生れ變つてくるがいさ。」

「お前さんは酒を飲ましてくる人が居るからよからうが、私達には誰が食はしてくれるんだね。方々に不義理をしてさ、わたしやもう近所の人に顔向けも出来やしない。酒ばつかり喰つて自分で自分の身體を悪くしても、お前さんは平氣だらうが、それで私達をひぼしにしても構はないのかい。」

—理想の女—

—労働者の子—

「何を云ふんだ。堅え飯よりか粥の方がよけい水気があらうつてもんだ。ひぼしになりつこはねえ。」

「だがね、」と母親はやさしく云つた。「辰さん所から借りた金はどうするつもりだね。もう明後日は是非とも返さけりやならないが。この前のこともあるからね。」
「どうにかならあ。明日と明後日と、仕事にやりやあ三四圓とまとまつてはいるからな。大丈夫、もう明日は休まねえから。」

父親は急に顔を曇らした。それで皆黙つてしまつた。彼のさういふ陰鬱な顔は、一家の者の上にもいつも暗い雲を蔽ひ被せた。何と云つても一家は彼一人の腕に頼るの外はなかつた。母親と千太とで麻つなぎをやつた所で、日に三十銭となることは稀であつた。

食事がすんで、父親は立ち上つたが、急に「おゝ痛え……」と云つて左足を投げ出した。

「どうしたんだね？」

父親は何とも答へなかつた。顔を曇らしたまゝ、兩眼を少し寄せて、室の隅を見つめてゐた。

「また焼酎をやつたんだね。」と母親は云つた。

「當り前よ。前祝ひは強えのでなくちや利目がねえんだ。」

「何が前祝ひだね。まだ雲を掴むやうな話ぢやないか。」

「何だど！お前は俺のすることにけちをつけるつもりなのか。」

母親は黙つてしまつた。

「おい、みよ、足を少し揉んでくれ。」

さう云つて父親は、其處にごろりと横になつた。するとその途端に、側にあつた薬罐やくかんが引つくり返つて、熱い湯がみよ子の足にかゝつた。みよ子はわつと聲を上げた。

—労働者の子—

「何をするんだね、酔っ拂つてさ。」と母親は叫んだ。

「馬鹿！」と父親は怒鳴つた。

母親は口を噤んだが、餉臺の上にあつた小皿を取るが早いか、それを臺所の板の間に打ちつけた。皿は微塵に碎け散つた。みよ子は大聲に泣き出した。

然し父親は妙に落ち着き拂つてゐた。彼は彼女の方をじろりと眺めたまゝ、上半身を起した。それから千太の方へ云つた。

「疊を拭けよ。」

「私がするよ。」と母親は云つた。そしてふいと臺所へ立つて行つて、バケツを足で蹴飛ばし、雑巾を持つて来て疊を拭いた。それから、なほ泣き立てゝゐるみよ子を膝に抱き取つて、その背中に顔を伏せてしまつた。

家の中には急に沈黙が落ちてきた。それらの光景のうちには、あらゆる狂暴と自制と憤怒と悔恨とが渦巻きながら静まり返つてゐた。千太は隅の方に蹲つて身

を震はした。そのまゝ長い時間がたつたやうに思へた。

母親はいつのまにか涙を流してゐた。彼女はみよ子を抱きしめながら云つた。

「可哀さうにね。もう泣かないでいゝ。明日になつたらいゝ所へ連れてつてやるよ！」

千太はふいに立つて、表へ飛び出した。母親の陰鬱な底力のある言葉の調子が彼を脅かしたのであつた。彼は突然、他家にやられたちよ子のことが幻に浮んで来た。虐げられた頭はよく強烈な幻覺に惱まされる。彼ははつきりとその日のことを眼の前に見た。——白髪之交つたさゝくれた髪をした婆さんと羽織を着た男どが家にやつて来て、ちよ子を抱いた父親と一緒にまた出て行つてしまつた。後に母親は生れたばかりのみよ子を抱きしめて泣いてゐた。それ以來ちよ子はもう家に歸つて来なかつた。——今起つて来たその時の幻の中に居る小さな女の兒は、ちよ子のやうでもあればみよ子のやうでもあつた。みよ子は今母親の膝に抱かれ

—理想の女—

てるのだと思つても、何だか不安心でならなかつた。彼は「白髪の交つたさくられた髪をした婆さん」を探し求むるやうな氣になつて暗い狭い通りを歩き出した。

彼はいつのまにか廣い電車通りへ出たが、その明るい街燈の光りを見ると、急に足を返してまた薄暗い裏通りへはいつた。身體が闇に包まれると共に、心も闇夜のうちに包まれてしまつた。闇黒のうちには何故ともなく、脅えた心を驅つてむやみと彷徨せしむるものが在る。彼は譯も分らず歩き廻つた。然し彼は家からさう遠くへさまよひ歩いたのではなかつた。宛も山中に迷つた者が、眞直に歩くつもりで實は同じ所をぐる／＼廻るやうに、彼もいつのまにか近くの入り亂れた小路をぐる／＼廻つてゐた。彼はそれらの通りの名前をよく知つてゐた。然し自分は何度も同じ小路を往き來してることには氣付かなかつた。

そのうちに彼は、ふいに足下から犬に吠えつかれた。ぐるりと向き返つて拳を握りしめ脊を伸して、その方を睥めてやると、犬は尾を卷いてこそ／＼と垣根の

向うへはいり込んだ。

彼は足を早めた。そしてふと或る路次の中にはいつた。通りぬけられることゝ思つたのである。路次は、或る家の裏口の所で鈎の手に曲つて、古井戸のある廣い空地に出で、それから奥が急に大きな建物で塞がつてゐた。その建物の前の平家との間に、狭い通路があつた。彼はその中にはいつていつた。通路の奥に木戸が一つ開かれてゐた。何の氣もなくその木戸をくゞると、檜葉が二三本並んでゐる小さな庭に出た。すぐ前に大きな建物の翼があつて、その一室の窓の障子が開いてゐた。見ると、室には明るく電氣がともつてゐたが、人は誰も居なかつた。と、彼は急に眼を輝かした。窓の木格子の前に机があつて、その上に二三の書物と共に小さな銀時計が一つのつてゐた。

彼は暫くちつと時計の銀の光りを見つめてゐた。するうちに、彼の足は二三歩後に退つた。それから彼はぐるりと向き返つて、逃げるやうに而も足音を盗みな

がら、通路をぬけ、井戸端を通り、路次から出てしまった。然し路次を出ると、急に足をゆるめて首垂れた。六七間先の方に、大きい邸の表門があつて、門前の奥まつた所に石が一つ据ゑてあつた。彼はその上に腰を下した。

それまでの彼の頭のうちには、名状し難い程種々の幻が浮んだ。腕時計をはめて中學に通つてゐる頭領の息子の姿、表通りの角の時計屋の硝子窓から見える澤山の懐中時計、時計の面のやうに輝いてゐる五十錢銀貨、活動館の眞赤な看板、小豆餡のはいつた白い餅菓子、それから、空の星のやうにきら／＼輝いてゐる何物とも知れぬ光り、さういふものが次から次へと、と云ふより寧ろ一緒に入り亂れて、彼の頭に見えてきた。然しその中で彼は何故とも知れず身を震はした。そして窓から二三歩退いた時には、それらの幻が急に暗い影のうちに没してしまつた。そして彼は路次の外に逃げ出した。路次の外に出ると、頭の中に擴つてゐた脅かすやうな暗い影の底から、母親のこゝろが浮んで來た。田中の旦那から貰つた五十錢銀貨を差

出した時の母の驚いた顔付、次に喜びの叫びを發して珍らしく自分を抱いてくれた母の打震ふ腕、それから今日、小皿を打ち碎いた時の母の立像と、みよ子の背中に垂れたその頭。彼は深い瞑想に、脅かされた少年の瞑想に、沈み込みながら其處の石に腰を下してしまつたのである。

冷かな夜の空氣が何處ともなく流れてきて、彼の頬を撫でた。彼は初めて我に返つたやうに頭をもたげた。月の無い晴れた空に星が燦然と輝いてゐた。彼は空が晴れてゐるか曇つてゐるか、少しも氣付いてゐなかつたのである。否寧ろ、彼の心に映じてゐた空は重苦しい雲に閉ざれてゐた。そして今俄に、星の輝くうち晴れた空を見上げた時、彼の心は云ひ知れぬ力を得た。それは、凡てが許されるといふやうな、神は凡てを與へるといふやうな、一種朗かな力であつた。彼は立ち上らうとした。

その時、向うから二三の足音がしたので、彼はまた腰を下した。書生風の男で

あつた。彼等は通りがかりにちらと千太の方を見やつた。それからかういふ聲が千太の耳に響いた。

「あいつぢやないか、先刻も居たのは。——さうだ。——變な奴だね。——あんなのが君……。」

それから先は聞えなかつた、千太は猛然と立ち上つた。そして知らないまに石を拾つてゐた。通りをすかし見ると、彼等の影が向うに仄白く浮んでゐた。彼は力をこめて石を投げつけた。然しうち震ふ彼の腕は方向を外らして、石は或る垣根の上から覗き出た木の茂みに當り、四五枚の木の葉と共にばかりと地面に落ちた。

彼は何かを睥むやうに眼を据ゑて、其處に一寸佇んだ。朗かな夜の空から與へられた方は、或る漠然とした憤懣の念に包まれた。彼はもはや一の目的をしか持たなかつた、時計を奪ひ取つてやること。さうすれば凡てが復讐されるやうな

氣がした。

彼はあたりを見廻した。通りには人影もなかつた。彼は爪先で而も足を早めて、路次の中にはいり込んだ。彼は殆んど凡て本能に導かれた。古井戸の側に小さな竹の棒が落ちてゐた。それを拾つて、先端を小さく齒で噛み碎いた。それから、大きい建物と平家との間の通路にはいつていつた。木戸は開かれたまゝだつた。向うの窓は閉されてゐたが、障子だけで雨戸はしまつてゐなかつた。彼はその側に忍び寄つた。中の氣配を窺ふと、誰もゐないらしかつた。二三分かゝつて、唾をつけた指先で障子の紙に大きな穴を明けた。室の中には布團が敷いてあつた。誰も寝てはゐなかつた。時計はすぐ眼の前に机の上につてゐた。彼は障子の破いた穴から、そつと竹を差入れた。それから、噛み割つたその先端に時計の鎖を引つかけた。音のしないやうにそつと持ち上げて、徐々に手元へくり寄せた。木格子の所まで來ると、片手を伸してそれを引出した。

彼は其處に竹の棒を捨てたが、またそれを拾ひ上げて、井戸の所まで戻つてゆき、井戸の中に投り込んだ。ぼんといふやうな反響がした。その音に彼は震へ上つた。そして時計を掌に掴んだまゝ路次を出ると、いきなり駆け出してしまつた。

暫く走つた後、二三の通行人に行き合つたことをはつきり意識した後、彼は息を切らして立ち止つた。ふり返つてみると、誰も追つかけて来る様子はなかつた。彼は目的を達したといふ喜びも、盗みをしたといふ恐怖も感じなかつた。初めの意圖も行爲の結果もはつきり意識しなかつた。たゞ或る未知の世界にふみ込んだやうな漠然とした懸念にのみ囚へられた。しきりに自分の前後左右が氣味悪く感ぜられた。そして頭をちつと脊骨の上に据ゑながら、ゆる／＼と歩き出した。暫く行くと、前方の軒並から何か仄白いものが覗き出してゐた。彼は震へ上つた。電柱の影に飛びのいて、時計を握つたまゝの手の甲で眼臉を擦つた。そつと覗い

てみると、眼が次第にはつきりしてきた。白い姿は、花崗岩の大きな唐獅子の像だつた。それに彼ははつきり見覚えがあつた。或る石屋の仕事場の前に二つ並んでゐるものだつた。彼ははじめて故郷に歸りついたやうな心地がした。

彼は唐獅子の方へ歩み寄つた。そして尾の所へもたれかゝつた。石の冷たさが着物越しに全身に傳はつてきて、はつと飛びのいたが、像の頭から足先まで見調べて、再びそれによりかゝつた。すると此度は、石の冷たい感觸が、熱に浮かされたやうな彼の頭を鎮めてくれた。彼は大きく息をして、あたりを見廻した。夜はもうだいたい更けてゐるらしかつた。

暫く彼はぼんやり唐獅子にもたれてゐた。何かをしきりに考へてゐながら、何を考へてるのか自分でも分らなかつた。彼の腦は、當もなく一人でに機械的の運動を續けてゐた。と突然、彼ははつと我に返つた。

向うに靴と佩劍との音がした。闇の中をすかして見ると、巡査の白服の姿が

すかに見えた。彼は殆んど本能的に唐獅子の後ろに身を潜めた。そしてその時、手に握つてある時計の始末に考へ及んだ。彼はそれを打ち捨てることはちたも思ひ浮べなかつた。時計はもう確實に彼の所有ものだつた。盗んだものでなく、他人のものでもなく、拾つたものでもなく、全然自分のものだといふ氣がしてゐた。たゞ、このまゝでは危いと思つた。金に代へなければならぬと思つた。その時彼の頭には、大公だいこうのことが浮んだ。彼の家の近くに住んでる浮浪少年で、大吉だいきちといふ名だつたが、自ら好んで人に大公と呼ばせてゐた。喧嘩の時なんか「だ、い、こ」と云つて罵られたが、彼はなほ平氣で大公といふ名を捨てなかつた。大公は二三度千太にかう云つたことがあつた。「何でも持ち出せる物があつたら、持つて來い。俺が買つてやる。」千太は今そのことを思ひ出した。そして時計は大公に買つて貰はうと思つた。

そこまで千太が考へ及んだ時、巡査は佩劍をがちやつかせながら、唐獅子の前

を通りかゝつた。千太は息をひそめた。巡査はやがて向うへ通りぬけてしまつた。その靴音が遠くに消え失せると、千太は唐獅子の影から頭を出して、通りを窺つた。向うに人影が二つ見えてゐた。彼はそれを見て却つて何となく安全な氣がした。そしてのそりと通りに出て來た。唐獅子の影を離れると、彼の足は二三歩走り出したが、彼はそれに氣付いて自分を制した。それから心持ち足を早めて大公の家に急いだ。どの家も大抵もう戸が閉つてゐた。

大公の家が見え出すと、彼は足をゆるめて、そつと戸口に近寄つていつた。戸は半ば開いてゐた。中は薄暗いうへに蚊帳が吊してあつた。然し戸の開いてゐることから、彼はまだ大公が歸つてゐないのを察した。家には母親一人だつたが、何故か大公が歸るまでは戸がすつかり閉められなかつた。恐らく誰かに對する何かの場合の相圖であつたらう。

千太は暫くその邊を往き來した。誰も通る者はなかつた。彼は待ち遠しくなつ

—労働者の子—

て苛ら／＼して来た。もうこのまゝ家に歸らうかどさへ思つた。

二十分ばかりたつた頃、向うの横丁に口笛の音がした。千太は軒下に身を潜めた。ひつそりとした夜の裏通りに響く「箱根の山は」と同じ譜の口笛は、次第に近づいて来て、やがて向うの角に、肩を聳かし兩腕を組んだ少年の姿が現はれた。

千太は走つていった。

「誰だ？」と大公は一步退いて身構へをした。

「俺だよ。」と千太は云つた。

「あゝ千太か。吃驚させるない。」

千太は小聲で口早に云つた。

「時計を拾つたから持つて来た。買つてくれよ。急ぐんだ。内密だぜ。」

「見せてみな。」と大公はませた口を利いた。

千太は時計を差出した。

大公はそれを取つて、裏表を向うの軒燈にすかし見たが、それからちつと千太の顔を見た。

「拾つたんだと？」

「あゝ拾つたんだよ、西井の横の方で。」

「拾つたんなら仕方はねえや。だがね、ちびるんなら、これからこんな物あ止したがいゝせ、すぐ足がつくからね。着物が一番分らなくていゝんだ。」

「時計はすぐに分るのかい。」

「なに俺がうまくしてやらあ。大丈夫だ。だがこれから時計をちびるなあ止せ。」

「拾つたんだよ。」と千太は云ひ張つた。

「どつちにしたつて同じこつだ。まあ此度はいゝさ。明日でいゝだらう。」

—理想の女—

「今何時だ？」

大公は千太が渡した時計の龍頭を押して、蓋を開いて眺めた。

「もう十二時近くだ。合つてゐるんだらうな。」

それから彼は一寸考へてゐたが、かう云つた。

「よし。此處に待つてゐろ。すぐに金を持つて来てやらあ。此處に待つてゐるんだせ。俺について来ちやいけねえせ。」

そして彼は急ぎ足で向うへ立去つていつた。

千太は、大公が家に歸らないで元來の方へ戻つてゆくのを見て、呆氣にとられ、てばんやりその後姿を見送つた。それから彼は、眞暗な路次の入口に身を隠して、大公の戻つて来るのを待つた。

暗闇の中に一人で蹲つてゐると、彼はしきりに家に歸りたくてたまらなくなつた。待たるゝのはもう金でもなく、母親の顔でもなかつた。たゞ柔かな——實は

煎餅のやうに薄つべらな汚い——布團のみであつた。彼の頭は今までの激動に壓倒されて、次第に下に垂れてしまつた。かすかに反映する軒燈の光りに仄白く見える、自分の草履ばきの指先が眼にとまると、彼は涙ぐんでしまつた。其處に屈んで、右手の先で足の親指の爪を弄つてゐると、荒涼たる野原に一人置きざりにせられたやうな頼り無い感が起つた。彼は立ち上つた。然しまたすぐに屈んで、足の親指の爪を弄りはじめた。凡てのことが遠い夢のやうな氣がしてきた。

彼は何處かに口笛の音がするやうに思つた。はつとして立ち上ると、何の音もしなかつた。けれどやがて、此度は口笛の音がはつきり聞えてきた。「箱根の山は」の譜が次第は近づいて來た。彼はその方へ歩いて行つた。大公が戻つて來たのである。

「うまくいつた。」と大公は云つた。

そして右手に何枚かの紙幣を掴んでゐた。

— 勞働者の子 —

「半分は俺が貰つとくせ。」

千太は一圓紙幣を三枚握らせられた。彼は眼を圓くしてそれを眺めたが、そのまま黙つて頭を下げて馳け出した。

「おい！」と大公の呼ぶ聲がした。

千太はふり返つた。大公はすぐ側にやつて来て、彼の耳に囁いた。

「馳けるない。馳けちやいけねえ。つけられるせ。平氣で歩くんた。」

「内密だよ。」と千太は云つた。

「馬鹿、そんなことは分つてらあ。」

千太は眼を伏せた。

「また何かあつたら持つて来い。うまくしてやらあ。」

そして大公はくると向うを向いて、立ち去つていつた。

千太は一寸佇んでゐたが、それからなるべく足音を盗んで小走りに家へ歸つて

いつた。

家の戸は引き寄せられてゐたが、少しすいてゐた。彼はそれを引開けて中にはいり、それから戸締りをした。上にあがると、薄暗い電燈が一つともつてゐて、蚊帳の中に皆寝てゐた。彼はそつとその中にもぐり込んだ。

彼は吃驚して蚊帳の中につゝ立つた。母親が大きな眼を見開いて、彼の方をちつと見つめてゐた。彼はその眼に吸ひつけられたやうになつて、顔を外らすことが出来なかつた。そつと身震ひがした。それから頭の中が石のやうに堅くしいんとなつた。

母親は低いきつい聲で云つた。

「今まで何處をうろついてゐたんだい？」

いつも、父から母からみよ子から千太の順になつて眠つてゐた。で彼と母との間にはみよ子が横はつてゐた。彼はそれも殆んど氣付かないで、母親の側に身を

— 理想の女 —

落した。その時みよ子は彼の膝の下になつて、わつと大聲に泣き出した。母はすぐそれを抱き取つた。みよ子は泣き止んでまた眼をつぶつた。母はそれをまた下に寝かした。

その間千太は首垂れてゐたが、母親の顔がまた自分の上に向けられた時、手に握つてゐる三枚の一圓紙幣を彼女の前に差出した。母親はそれを引つたくつて、紙幣と彼の顔とを見比べてゐたが、やゝあつてかう云つた。

「このお金はどうしたんだい？」

「拾つたよ。」と千太は答へた。

「拾つたつて！ それちや今まで何處をうろついてゐたんだい？」

「大公が淺草に連れていつてくれるといふからついて行つた。」

「大公が？」

「うん。」

母親は暫くちつと千太の顔を見つめたが、急に恐ろしい身震ひを一つして、千太の上に掴みかゝつた。千太は忽ち其處に打ち倒されて、腕をねち上げられた。

「嘘つきめが、騙りめが！」母親は怒鳴つた。「本當のことを云はないか。かうしてやる。これでも云はないか。」

千太は、ねち上げられる腕の痛みに堪へかねたが、ちつと齒をくひしばつた。

「まだ云はないか！」

千太は眼と鼻と口とを一緒に溢めて叫んだ。

「云ふもんか。さあねち切るなら切つてごらん。」

母親は腕を放して、彼の背中を殴りつけた。

「何をするんだ。」と父親の聲がした。彼は眼を覺して半身を起してゐた。

母親は云つた。

「千太がね、こんなに遅く戻つてきて、紙幣を三枚持つてるのさ。どうしたのか

ときくと、途で拾つて、大公と一緒に淺草に行つたといふぢやないか。きつと悪いことをしたんだよ。いくら責めても強情を張り通すんだよ。」

「よし、」と父親は云つた、「俺に任せろ。」

父親は紙幣を布團の下に入れ、それから千太を床の上に引き据ゑた。

「寝つちまへ！」と父親は云つた。

千太は喫驚してその顔を見上げた。そして父の恐い顔の前に身を震はして、そのまゝ布團の中にもぐり込んだ。

息苦しくなるのを、ちつと忍んでゐると、眼の前がぼんやりして来て、頭の底にその晩のことが走馬燈のやうにぐる／＼廻轉し出した。暫く彼は驚いたやうにそれを見つめてゐた。すると急に凡てが消え失せて、その跡の間の中から、ざらざら光つてる銀の時計が一つ浮き出して來た。それが次第に眼の前にぐん／＼迫つてくる。逐ひ拂はうとしたが、どうにも出來なかつた。遂には眼が一杯ざら／＼

した光りに満たされ、息が苦しくなつてきた。氣が遠くなりさうな心地がした。彼は急にがばとはね起きた。

異様な光景が彼の眼にはいつた。父親が蚊帳の隅に坐つて、兩腕を組みながら顔を澁め、眼は一つに集つてちつと何かを睥めてゐた。心は深い夢の底にでも浸つて、身體だけが石のやうに堅くなつてゐた。その前には、母親が布團の上につつ伏して、肩を震はせながら泣いてゐた。丁度痙攣の發作に襲はれたやうな泣き方だつた。みよ子はすや／＼眠つてゐた。

千太は眼を見張つた。と、急に云ひ知れぬ恐怖に襲はれた。ちつとして居れなかつた。いきなり立ち上つて蚊帳の外へ出やうとした。その時、父親の大きな手は彼の腕を捉へた。彼は齒をがく／＼うち震はせながら、其處に引き倒された。

父親は千太を押へつけたまゝ、何とも云はなかつた。誰も何とも云はなかつた。恐ろしい沈黙が室の中に漲つた。そして、今にもその沈黙がはち切れさうになつ

た時、千太は叫んだ。

「堪忍しておくれ。盗んだよ、時計を。大公がそれを買ってくれたんだ。堪忍しておくれ、堪忍しておくれよう！」

千太は恐ろしさに身を跳いた。然しもう父親の手は放されてゐた。彼は身を起した。そして、盗みといふ觀念がはじめてはつきり頭に浮んできた。彼はまた立ち上つて逃げ出さうとした。

父親の手は再び彼を其處に引き据ゑた。

「馬鹿！」と父親は一言怒鳴つた。

すると、みよ子が急に、物に溜ためえたやうに泣き出した。母親はそれを膝に抱き取つて、妙うづろに空洞な氣味悪い眼を見張つてゐた。

「堪忍しておくれよう。」と千太は叫び出した。「窓の所に時計が見えてゐたんだ。竹切れの先を噛み割つて、それを引き出してしまつたんだ。大公の所へ持つてゆ

くと、金と代へてくれたんだ。俺は何にもしない。堪忍しておくれよ。これから取り返してくる。堪忍しておくれよ、盗ん……。」

「馬鹿！」と父親はまた怒鳴つた。「黙つてろ。」

また沈黙が落ちて來た。

千太は、豫期してゐた苛責を受けないので、急に今までの狂猛な激情のぶつかり場を失つて、ぼんやりしてしまつた。そしてたゞ妙な氣持ちになつて、頭を掻いた。

それを見て、父親は片方の眼を小さくし口を歪め、何とも云へない表情をした。「騒ぐこたあねね。静にしてろよ。」と彼は云つた。そして母親の方を向いた。「今晚はもう寝つちまうんだ。騒いぢやいけねえ。俺が知つてる。」

父親の顔には獰猛な表情が浮んだ。對象のない而も殆んど深さの知れない憎悪と憤懣との顔付だつた。それを見て母親も千太もぞつと悪寒を感じた。彼等は或

—労働者の子—

る絶対的のものに服従するやうに、黙つて布團の中にもぐり込んだ。

暫くして千太は、そつと首を出してみた。父親はまだそのまゝの姿勢であつた。

千太は脊骨からぞつと震へ上つて、また布團の中に首を引つこめた。

第十六列車

汽車は琵琶湖の岸に沿つて走つてゐた。叡山のあたりに懸つた夕陽の光りを斜に車窓に受けて、車内は妙にぱつと明るくなつてゐた。その明るみの中で乗客は皆まじ／＼と互の顔を見合つた。凡てに無關心な軽やかな落ち付きが皆の心を包んで居た。誰も露はな自分の顔をうち開けた他人の瞳の前にそむける者はなかつた。そして車の柔かな動揺と車輪の響きとにゆつたりと身體をゆだねてゐた。京都驛の混雑が静まつてどつしりと腰掛の上に身をもたした乗客の多くは、東京まで行く人達であつた。

私はずつと車内を見渡してみた。下關から一緒に乗つた人達は、大抵神戸大阪京都などで下りてしまつて、残り少なくなつてゐた。私の隣りに居る老父を伴つた支那人、向ふ側の温厚らしい肥つた老紳士、それから妻と六つ位の娘とを連れ

た將校、それが重なる人達であつた。將校は少佐の肩章をつけてゐた。大きい鞆や包みを幾つも並べてゐる所を見ると、新たに任地に赴くものゝやうに思はれた。昨日から妻と二人でしきりに娘の世話ばかりしてゐるのを、私はよく體屈な眼で眺めたものだ。娘は眼のぼつちりとした可愛い顔をしてゐた。田舎者らしい女中が時々三等車の方からやつて来て、種々な用を足してゐた。

其他は皆新らしく途中から乗つて来た人達であつた。丸髷とハイカラと二人連れの婦人、色の白い商人體の男、太い金鎖りを帯から垂らした赫ら顔の男、一寸職業の分らない身軽な背廣に烏打帽の男、制帽をかぶつた二人の大學生、それから束髪の小柄な婦人。……私はこの束髪の婦人が何處から乗つたか知らないが、大阪を過ぎてからふと私の眼を引いたのである。

私は半年許り前ある女に戀をした。女の身分は今茲で云ひたくない。彼女は私より年上で二十七になつてゐた。いつも人妻風の束髪に結つて、微笑む時片頬に

殆んど見ねない位の笑靨が寄つた。彼女も私を愛してくれた。私達はよく一緒に東京の郊外を歩き廻つた。時には玉川縁の宿屋の二階から、河原の朝景色を眺めたこともあつた。それ位女は自由な境遇に在つた。然し私達は半年許りで別れてしまつた。別れなければならぬ事情が女の方に在つたのである。然し私達は孰れが孰れを欺いたのでもない。たゞ静かな甘い戀だつた。其後私は女に逢はない。

向ふの束髪はすの婦人が非常によくその女に似てゐた。たゞ全體のニュアンスで別人だと分るだけで、顔立にこれと云つて異つた點を見出し得る所はなかつた。彼女は私と斜はすかいの向ふに腰掛けて眞直に向いてゐたので、私は自由にその顔を眺めることが出来た。その不揃ひな髪はすの生際はつきはや伏目がちな眼や、おつとりした口元や、細面ほそおもての顔付を、私はしげ／＼と見守つた。どうかすると彼女も私の方をふり向いて、その黒眼がちな視線に私の視線が合ふこともあつた。然したゞぼんやりとお互の眼を見合ふだけであつた。心も感情も列車の動搖にゆられて何物かを捉

へるには餘りに體屈しきつてゐた。

私は前日來の車中に倦み疲れて、窓硝子に顔を寄せながら外の景色を眺めてみた。

汽車は丁度湖水の岸に沿つて走つてゐた。時々佗しい寒村の間を抜けてはまたぱつと開けた水際に出た。妙に空氣が稀薄に思へるやうなうち晴れた初春の青空が、一面に擴つてゐた。近江八景を後ろに残して對岸には遠く山々が連つてゐた。黝くろすんだ帆を張つた小舟が二つ三つ静かな水面を滑つてゆくのが見らるゝ。平らな砂地の汀から、青笹の立つてゐる遠淺の所から、更に小舟の滑つてゆくあたりまで、水面は一樣に夕日を受けて銅色に輝いてゐる。うち開いた大氣が暮はれて窓を開くと、冷たい空氣が頬を撫でたので、私はまた急いで窓を閉じた。

ふり返るとかの束髪はすの婦人は、腰掛の上にきちんと坐つてこちらに背を向けたまゝ、窓枠に凭れて外をちつと眺めてゐた。私は何となくほつとしたやうな氣持

ちになつて、棚から雑誌を取つて読んでみた。

私の隣りに居た赫ら顔に金鑽りの人が、傍らの色白の商人に何やらしきりに話をしてゐた。その途切れ途切れの言葉が私の耳に聞えた。

「あちらのものは大したものです。上つてきた奴は鉄をふり立て、向つてくるですからね。其奴を鈍でぶんなぐつて叩き殺すです。何しろ足を擴げると壘一枚位はあるといふ代物ですからね。その足だつても私の手頸位はしてゐます。」

「へえ、それでやはり網で取りますんですか。」

「いや網の外からついて来るから馬鹿な奴ですな。肴を取るのに普通の地引網を引くです。すると奴さん網の中の肴を取らぬと思つて、網の外につかまつて陸の上までついて来るです。陸に上つてもまだ此處は自分の世界だぞと云はんばかりの顔をしてゐます、それが一度に十匹以上もついて来る事が有るです。罐詰にするのはその足の肉ばかりです。」

「へえ、それでは丸で餘分の儲け物ですな。」

「まあさうです。然し場所によつては専門に蟹を取つてる所もあるですが、この節では餘り割に合はないさうです。」

「何しろ北海道といふ所は種々な變つたものが居りますな。」

私はその時漸く北海道の蟹の話だつたことが分つた。で讀みたくもない雑誌を投り出して二人の話に耳を傾けた。

金鑽りの男は、それから北海道では鯛が取れなくて非常に困ることから、些細な經濟上の問題にまで立ち入つて、遂にはアイヌの話にまで及んだ。

「それでアイヌにも美人が居ますですか。」と商人は尋ねた。

「ゐるには居ますが、どうも我々の趣味には合ひませんね。ですが稀にはアイヌの娘を妻に貰ふ男も居るです。何しろ奴等の間では我々の妻となることは無上の光榮としてゐるです。従つてそれは随分面白い冒険談もよく起るです。」

そう云つて彼は或るアイヌ娘と或る日本の労働者との間の「冒険談」を話し出した。その話が餘り可笑しかつたので、私は彼の方を向いて笑顔をしてきいてゐた。すると彼は私を認めて、昂然と斯ふ云つた。

「被征服者の女が征服者の男の犠牲になるのは自然の勢です。あなたなんども、」と彼は私の方に顔を向けた、「一つアイヌ部落の方に出かけなすつたら面白いことが出来ますよ。勿論もう今では餘り面白いこともありませんが、さうですね、十年も早く生れて來らるゝとよかつたですね。」

私は只苦笑ひをした。すると商人がその先を引き取つて云つた。

「ではあなたなどは丁度いゝ時にお生れなすつたわけですね。」

「はゝゝ、いやその代りにはかう年をとつてしまつたです。」

そして彼はつろりと片手の掌で顔を撫でた。私はそれが可笑しくなつてふと眼をそらすと、かの束髪の婦人がこちらをぢつと見てゐた。そしてつり込まれるやうに私達は眼で笑つた。

金鎖りの男は妙に白けた表情をして口を噤んでしまつた。

汽車は時々小さい驛に停つてはまた疾走を續けた。私達の客車には誰もはいつて來なかつた。疲つ切つた氣が車内に満ちてゐた。制帽の大學生が大きい欠伸をしかゝつたが、そのまゝそれを口の中で噛み殺してしまつた。單調な車輪の音がいつまでも續いた。

米原に着いた時車内に電燈がついた。室内の濁つた空氣が、弱い電燈の光りと外の薄ら明るみに輝らされると、乗客の心は急に蘇つたやうになつた。皆何かしら用ありげに身體を動かした。たゞ向ふの温厚らしい老紳士だけが泰然としてゐた。

金鎖りの男は急に立ち上つた。「米原ですね、」と彼は誰に聞くともなく云つて、急いで手廻りの鞆を取つた。そして丁寧に私達の方に頭を下げて惶しく下りて行

つた。

商人は私の方を見てちらと笑つた。その時切下げの老母を連れた鬚のある紳士がはいつて来たので、彼は私の方に席をづらして寄つて来た。

「どちらまでいらつしやいます？」

「東京まで行きます。」

「はあ左様ですか。私もさうです。どうか宜しく願ひします。」と彼は如才ない挨拶をした。

米原から汽車は急に黒煙を吐いて山間の僻地を上つて行つた。初めは眞黒い煤煙の影がレールに沿つて地に印してゐたが、やがてそれも蒼茫たる夕暮のうちに消え去つてしまつた。乗客の多くは辨當を済まして、その折を窓の外に投げ捨てた。小さい谷川の岸に名も無い雑草が一つぼつりと白い花を咲かしてゐたりした。車内は皆淡い電燈の光りの下にしめやかに黙り込んでゐた。

私は窓から蒼白い山間の暮色を眺めた。雑木林や切り開いた崖の地面の膚がすぐ窓の外を飛び去つた。白い道標が所々に立つてゐて、坂道を汽車の速力は案外ゆるやかであつた。轟然たる響を立て、幾つかの小さいトンネルを過ぎた。

ひそやかな薄暮の侘びしさが私の心に迫つてきた。疲れた頭がそのままに澄んできてしきりと種々なことが考へられた。私は過去のことや未來のことを思ひ廻らした。凡てが頼り無い色を帯びて私の心に映じた。そして私は我如らず別れた戀の女のことをいつのまにか思ひ耽つてゐた。

「またいつお目にかかれるか分りませんわね。お身體を大事にして下さいよ。」女はさう小供のやうに云つてきかせながら、涙を流した。私も彼女の胸に顔を押し當て、甘えるやうに涙を落した。然しそれは安らかな悲しみだつた。そして優しい戀がいつまでも私の胸の奥に秘められて来た。

私はまた向ふの束髪の婦人を眺めやつた。彼女はやはり窓枠にもたれてちつと

外の方を見てゐた。

トンネルを出て、小驛を過ぎる頃から、汽車の速方は急に早くなつた。道が平らになつた所から見るともう餘程高くに上つて來たらしい。熊笹の茂みに雪が消え残つてゐるのが見られる。顧みると伊吹の雄姿が夕闇のうちに高く聳えてゐる。頂の所に少しの雲を漂はして、山腹は月の光りでも受けたやうにはの青く浮んで見える。汽車の方向が少し變ると、果して西の空に下弦の月が懸つてゐた。向ふ側の背廣の男が、しきりにこちらの窓越しに外を眺めてゐる老紳士に、かう囁くのが私の耳にはいつた。

「私は度々此處を通りますが、伊吹に雲の懸つてゐないのをまだ見たことがあります。よほどこの邊は氣流が錯雜してゐると見えます。」

「はあさうですか。」と云つて老紳士はやはり外を透し見てゐる。

私の耳に背廣の男が云つた氣流といふ言葉が何だか悲しい響きを傳へた。私の

心は淋しかつたのである。私は遠ざかり行く伊吹の嶺に懸つた雲を長く見つめてゐた。

關ヶ原の小驛に着いた時、列車は何かの都合で五分餘り停車した。私は車室を出て、プラットフォームの小砂利の上を歩いた。僅か六時を少し廻つたばかりだが、山國はもう薄暗く暮れてゐた。まだ星の出ない夕暮の空色を受けた空氣を、アーク燈の光りが青く照らしてゐた。月は西の山に隠れて見えなかつた。プラットフォームには垣を廻らした權木が所々に植ゑてあつた。私はその前をあらこちらと往き來して、長く續いたレールの上を見やつた。私の心には淋しい古戦場の姿が浮んでゐた。

關ヶ原を發してから汽車は一直線に走つた。

「晩はまだ冷えますな。」と隣りの商人が私に話しかけた。

「ええ。それに先刻はまだ途中に雪が残つてゐたやうです。」

「何しろ本線ではこのあたりが一番寒い所ですからな。夜明けなんかに通るとそれはめつきり冷えますよ。」

「さうでせう。」

彼はこの邊は幾度も往來するらしかった。そして驛々の辨當のことなどを私に話してきかした。然し私はもう口を利きたくなかつたので、いゝ加減に返事をしてゐると、やがて彼も口を噤んでしまつた。そして棚から空氣枕を取つて腰掛の上よきに眼を閉いだ。

私は過ぎゆく村々の灯を眺めてゐたが、淋しい心地が軽い列車の動搖にゆられて、そのまゝに頼り無い安靜のうちに陥つていつた。で私も空氣枕を窓に押し當ててその上に頭をもたした。隣りの支那人が父に何やら支那語で話してゐる聲が耳にはいつたが、私は向ふの束髮の婦人をちらと見て、そのまゝ眼を閉ぢた。

私はそれからうつら／＼と眠つたらしい。途中で停車の折に一二度薄眼を開い

たが、その他は何にも知らなかつた。

ふと周圍の騒々しいのに眼を覺すと、汽車は大きい驛に着いてゐた。名古屋といふ驛夫の聲が幾度も私の耳に響いた。私は空氣枕を膝の上に落して、ぼんやりと車内を見渡した。車内はまたひとしきり混雜した。四五人の人がはいつて來て各自に自分の席を探した。米原から老母を連れて乗つた鬚の紳士は寢臺車の方に移つた。それから向ふの將校が車掌を捉へて何やら話してゐた。「金曜」といふ車掌の言葉が私の耳にはいつた。この列車は米原東京間一週三回二等寢臺車も連結せらるゝが、今日は丁度その一日の金曜に當つてゐる、といふやうな話だつたらしい。やがて將校は妻と娘とを連れて寢臺車の方に移つた。女中がまた三等車の方からやつて來て、手廻りの小さい包みを下げて後について行つた。その後でボーイが幾度も往來して鞆やかなかかをすつかり運んでしまつた。

將校の一行が立ち去つた後には只今乗つて來た二人が座を占めた。一人は茶の

チヨキを着た背廣に眼鏡の男で、も一人は羽織袴をつけてゐた。彼はすぐ様羽織と袴を脱いで、それを丁寧に疊んで鞆の中にしまつた。それから中折帽を柵の上にのせ、烏打帽に代へて、廣く敷いた毛布の上に寝轉んで新聞を読み初めた。凡てが敏活に巧妙になされた。

車内の動搖が静まると、私は窓を開けて驛内を覗いてみた。多くの見送人の間を分けて物賣りが聲高に叫びながら往來してゐた。明るい構内の向ふには電車が幾臺も停つてゐる。都會はまだ宵のうちに在つた。然し私の心はもう深い夜の氣に満たされてゐた。私はコンクリートの上をごろ／＼轉つてゆく給水車の影をちつと見送つた。

名古屋から汽車が闇をついて疾走するにつれ私の眼は次第にまた冴えて來た。私は疲れた身體を種々な位置に置いてみたり、雑誌を手を取つたりしてみた。それからまた長い間天井の電燈の光りを仰ぎ見た。

「ご免下さい。」と突然隣りの支那人が私に云つて、私の方に席を寄せて來た。そして彼は老父を腰掛の上に長く寝かした。

「どうかしましたか。」と私は尋ねた。

「父が氣分が悪いと云ひます。」

彼の父は青い支那服を着てゐた。禿げ上つた頭をぐたりと空氣枕の上に押しつけて眼を閉ぢてゐた。額が廣く眉が薄い所など、その青年によく似てゐた。青年は自分の二重マントを柵から取つて、父の上にそつと着せた。

私は鞆から仁丹を取り出して彼に與へた。彼はそれを受取つてどの位やつたらいかと私に尋ねた。そして私の云つたゞけを父の口に含ました。二人は何やら支那語で囁き合つた。

「有り難うございます。大變氣分がよくなつたと云ひます。」と彼は安堵したやうに私に云つた。そして私に残りの仁丹を返さうとしたが、私がつつておくやうに

云つたので、またそれを丁寧に懐にしまった。

私は下關からこの支那人と隣り合つてやつて来た。山陽線の夜、この支那人は殆んど眠らなかつたらしい。私は列車中は朝と宵とに少し眠る外夜中に眼が冴へる癖があつたので、自然私達は他の乗客の寝姿を見ながら少しづつ話を交へた。断片的な話を総合してみると、彼は前から東京に来てゐて、此度父を連れて来るために支那に歸つたのであつた。福建省の者と云つてゐた。彼は老父を伴つて上海から長崎に渡り、同地に一泊して、それから汽車で東京に向ふのであつた。私が革命の話聞き初めると、彼は何にも知らないと云つて口を噤んでしまつた。然しその沈黙が却つて彼が革命運動に關係あることを私に推せしめた。然し私は別に彼を追求しなかつた。私は遠く國を離れて来たこの親子の内心をいたはりたく思つた。で彼が非常に日本語に巧みであつたに拘らず、私達はそれきり口を利かずにやつて来た。親子で一つの辨當を突つついてゐるのを、私は側に黙つて見てきた。

老父は辛うじて眠つたらしい。青年は私の方に背を向けてそつと父の額に觸つたりしてゐた。で私は視線をそらして車内を見廻してみた。黙つて端然と腰掛けてゐる者もあれば、雑誌や新聞を見てゐる者もあつた。束髪 of 婦人は空氣枕に顔を押し當てゝゐた。將校の後に長く寝轉んだ先刻の男は、新聞を投り出して烏打帽を目深にかぶつて、もう眠つてゐるらしかつた。

眼が冴へて眠れないにつれ、私は列車の速力もごかしいやうに思へて、むづむづしてきた。旅行案内を取つて驛々の名を調べてみたり、到着までの時間を測つたりした。それからふと思ひついて食堂車の方に行つてみた。

其處には四五人の人が居たので、私は片隅の小さい食卓を占領して、ビールと二三の品を求めた。食卓の上の花瓶には桃の花と菜の花とがごちやく／＼に挿してあつた。私の向ふには實業家らしい肥つた人が眼の鋭い瘦せた男に小聲でしきり

に囁いてゐた。私の左側には二人の學生らしい青年が大聲に話し合つてゐた。

「あんなへまな奴が譯なくはいれたんだからね。随分情實もあるだらうさ。」

「大ありだ、そのために成績がよくても卒業して一二年年も遊ぶやうになる者があるんだからね、馬鹿らしい話さ。」

「然し君、眞に偉い者はどんな苦しみをしても何時かは自分の運命を開拓するものだよ。」

「そんなのは異數にすぎないやね。普通の人間にとつては出立で一生の運がきまるんだ。其處にいくと君なんか財産もあるし家柄もあるし、まづ幸福の方だよ。そして幸福な者には不幸な者の心は理解が出来ないよ。」

「いや僕だつて、全く無一物になつて自分の腕一本を試鍊するやうな境遇に自分を置いて考へることもある。」

「それはたゞ想像だけだ。想像で實際が分るものぢやない。」

「然し君、想像だつて現實の可能性は持つてゐる。特に僕達青年は可能性に生きることが餘程多い。可能性に生きない所に進歩はないと云つてもいゝ位だ。」

「それはさうかも知れない。……然し何だね、いくら切迫せつぱいつまつても人生は何處かにぬけ道が出て来るものらしいね。」

「あゝ少くとも生きてる間は……。」

私はそんな話を耳にしながら一人でビールのコップを干した。窓硝子からは遠くの灯がちら／＼と明滅してゆくのが見られた。私はそして長い間黙々としてゐた。他國人エトランゼールといつたやうな感じが自分のうちに澱んできた。

名古屋から寢臺車の方に移つた將校が妻君だけを連れてはいつて来た時、私は立ち上つて其處を出た。自分の車室に歸ると私は何かしらほつとした。

ふと眼をやると向ふの束髪の婦人の姿が見えなかつた。車内をすつと見渡したがそれらしい影も見えない。彼女の荷物もすつかり無くなつてゐた。私が食堂に

はいつてゐるうち、いつか途中の驛で下りたのであらう。

私は佗びしい自分の心をちつと見つめた。何かとり返しをつかないことをしたやうな感じが私のうちに在つた。然しそれが何であるか自分にも解らなかつた。私は眼を閉ちて列車の轟然たる響きに耳を傾けた。そのまゝでちつと時間を消さうと思つた。

先刻から何かしきりに父と囁き合つてゐた隣りの支那人が、そつと私の顔を覗いた。私が眼を開くと彼は困却の體で私にかう云つた。

「金を少し貸して下さいませんか。」

私は驚いて彼の顔を見つめた。彼はその譯をと切れ／＼に話した。……父がまた氣分が悪くなつて途中で下りたいと云ふ。然し下りて二人が一泊するには持合せの金が少し足りない。寢臺車ももう空いてるのはあるまいが、あつても父は嫌だといふ。それでどうにも仕方がない。父の命令で金は上海から銀行爲替で送つ

てしまつて、當座の小使だけしか身につけて來なかつた。それももう少ししか残つてゐない。東京に歸つたらすぐお返しに上るから少しばかり貸して貰ひたい。

私はどれだけ要るかを尋ねた。七圓ばかりで間に合ふだらうと彼は答へた。で私は十圓紙幣を一枚貸してやつた。

彼は私に長いお辭儀をした。それから自分の名刺を出して私の住居を知らしてくれと云つた。彼の名刺には陳其煌として小石川區音羽町一丁目と印刷してあつた。

彼は何やら老父に囁くと、老父は漸く身を起して私の側にやつて來た。

「父がお禮を云ひます。」と陳が云つた。

老人は私に頭を下げてから手を差し出した。で私はその手を握つてうち振つた。肉の少い皺立つた皮膚の感觸が私の掌に残つた。

彼等は急いで荷物を纏めた。

「いゝ宿屋のある停車場が近くにありませうか。」と陳は私にきいた。

私は旅行案内を取つて調べてみた。汽車は丁度蒲郡と御油の間を走つてゐた。で私は豊橋で下りたがいゝだらうと云つた。

御油の驛に一寸停車して豊橋に着くまで、彼等は荷物の側に不安げに座つてゐた。私はその時老人の顔をつくく眺めた。妙にしまりの無い額から眉のあたり、その下に怪しく光つてゐる小さい眼、瘦せこけた頬に寄つた皺、うす黄色に濁つた皮膚の色、異國の旅人といふ印象が私の心に強く印せられた。私も豊橋に着くまで妙に不安な時間を過した。誰も一言も發する者がなかつた。

「少しお頼みありますが。」と云つて陳は鞆の中を探つた。そして小さい封筒を取り出して父に何やら云つた。老人は頭を振つて何か答へた。すると陳は私の方に向いて云つた。

「急ぐ用がありましたからお頼みしやうと思ひましたが、私の方で電報をかける

ことにしました。」

片手で老父を支へて陳は車室を出ていつた。私は窓から鞆を出してやつた。立ち去る前に老人はまた一度私に握手を求めた。それから私は赤帽に荷物を持たして驛を出てゆく二人の姿を見送つた。

豊橋を發してから私は支那人の跡に廣く席を取つた。向ふ側の温厚な老紳士が不思議さうな眼でちつと私を見てゐた。私もその眼を見返した。然し私達は一言も交へなかつた。下車した人のことに就て一言の噂もしないのは、殆んど車中の習慣らしかつたので。いや習慣といふより寧ろ直接に私達の心を打つ何物か、其處に何時もあつたのである。

もう十時を過ぎてゐた。私は腰掛の上に着つと身を沈めて、二人の支那人のことを思つてみた。それから急に種々の人のことが眼先に浮んできた。赫ら顔の金鎖りの男、家族を連れだした將校、昔の戀人に似た束髪の婦人、………私は彼等を

暫くのうちに皆忘れてしまふであらう、そして彼等も亦。

濱名湖を渡る時、闇澹たる水面の上を私は見やつた。遠くの水邊の茅屋から洩るゝ一筋の燈火が、ちら／＼と水の上に反映を漂はしてゐた。

身體の疲勞に眼瞼が重くなるのを感じながら頭の心は益々冴えて來た。淡い頼り無い哀愁が私の心にしみ／＼と襲つて來た。車内を見渡すと、乗客の多くは思ひ思ひの姿で眠つてゐた。毛布の上に寝てゐる者もあり、腰掛に坐つたまゝ窓枠にもたれてゐる者もあつた。名古屋から乗つた茶のチョコッキの男は、片足を長く車内に伸してゐた。二人の大學生は果物を取り出してしきりに食べてゐた。

汽車は乗る人もない小驛にまで一々停つた。驛夫の聲が淋しい夜のうち響く。私はある驛で手足を伸すために外に出てみた。空は曇つたのか星の光りも見えなかつた。アーク燈の光りに淋しく輝らされたプラットフォームには、丁香の花が咲いてしきりに匂つてゐた。私はそのまわりを幾度も往き來した。

「發車しますよ」といふ驛夫の聲に驚いてまた車内に歸ると、汽笛の音が長く響いた。

大井川を越す頃から汽車は小驛をぬいて急行の速度で疾驅した。私はいつのまにか倦怠に馴れてたゞぼんやりと天井の電燈を仰いでゐた。静岡に着いた時、眠つてゐた乗客の二三は一寸首をもたげたが、またそのまゝ眠つてしまつた。

静岡から一つ二つ小驛を通過した頃であつたらう。私は眼覺めながらひどくぼんやりしてしまつてゐた。その時急に激しい汽笛の聲が響いて、汽車は止つた。激しい動搖に乗客は皆眼を覺した。窓の外は黒闇々たる夜であつた。二三の人は窓を開いて外を覗いた。急に冷たい空氣が流れ込んで、不安な沈黙のうちに人の眼が光つた。支那人が下りたので私の隣りになつた丸鬚の婦人が、低い聲で連れの女に囁いた。

「何うしたんでせう？」

一分二分、不安な緊張が続くと、やがてまた汽笛の聲がして汽車は緩かに進行し初めた。やゝあつてある小さい驛を過ぎてから汽車は従前の速力に復した。それまでずつと外を覗いてゐた隣りの色白の商人は、窓を閉めて私の方に向いた。

「静岡を過ぎて暫くの所ですな。」

「えいさうです。」と私は答へた。

「どうも驚きましたな。」

「何かあつたのですか。」

「私はまた轢死人かと思つて喫驚びつくりしました。」

彼はさう云つて初めて安心してらしくほつと息をついて煙草に火をつけた。

私はちつと彼の顔を見守つた。彼は煙草を深く吸ひ込んで、自分から話し出した。

「私は、えいさ一昨年こぞの夏でしたかな。この邊で人を轢いたことがあります。轢かれた人の姿をカンテラの光りでよく見ました。何處がどうなつたかかかはつきりは分りませんでした。血みどろのぶく／＼したやつを見るともう眼が眩くらみさうでした。」

彼は一寸言葉を切つて當時を追想するやうな眼付をした。

「何しろ轢死だと云ふのもう無中になつて線路に飛び下りて行つたものです。それからまたどうして車内に歸つて來たか自分でも覚えません。妙なことにはその晩月があつたことだけを一番はつきり覚えてゐます。それからもう暫くは胸が悪くて仕方がなかつたものです。……何しろ自分の乗つてゐる車が轢いたんですからな。柔い人間の身體の上をぐち／＼と潰していつたんですからな。」

私は彼の話し方が餘り變だつたのでどう答へていゝか分らず黙つてゐた。と私達の話をおつと聞いてゐた向ふ側の背廣の男がかう云つた。

「一體この邊はよく轢死者のある場所だと云ふではありませんか。」

「はあさうです。どうも轢死人のある場所は大低きまつてゐるさうです。それにまた人を轢く機關車も奇體にきまつてゐるさうです。何かの因縁があるんでせうな。」

それから話は種々な轢死者の個々の問題に亘つていつた。私は竊に背廣の男がその方面に豊富な智識を持つてゐることに驚いた。

車輪の響きに私達の話が何のことやらよく分らぬ人達は、また眠りに就いてしまつたらしかつた。向うの老紳士と茶のチョコッキの男とが、黙つて耳を傾けてゐた。

「私はさる轢死者の云ふのを聞きましたが………」と背廣の男は云ひかけて私の顔を見た。「いや轢死を仕損じた者です。その者はたゞ片手だけを断ち切られたんです。何でも列車の進行を目がけて飛び込んで、今將に轢かれやうとする間際

には、全體に冷たいものを感じるだけださうです。するともう氣絶してしまふんでせう。まるで裸で冷水の中に飛び込んだやうな工合だと云つてゐました。」

怪しい誘惑が自分を襲つてくるのを私は感じた。ふと名古屋で車掌の發した金曜といふ言葉を思ひ出した。それから眼を擧げると客車の番號は二九一五とあつた。私にはその數字が何だか神秘らしく見えて來た。

然し話が横に外れて情死の方面にまで及ぶ頃には、周圍の人も話す人も一様に懶い表情を浮べて、やがては黙り込んでしまつた。そして間もなく皆事もなげに眼を閉ぢた。

私は一人眼を開いて妙な緊張した感情のうちに浸つてゐたが、自分が何にも考へも思ひもしてゐない惘然たる状態に在ることを遠く意識してゐた。沼津に一寸停車した時、私は機械的に時計を取り出してみた。もう午前の三時に近かつた。

私は腰掛の上に長く毛布を擴げた。丸髷の女と連れの高イカラな婦人が私の方

を枕にして寝てゐたので、私はそちらを頭にして窮屈ながら横になつた。列車の動搖が遠く頭に響いてゐたが、身體が妙にたるんできて、私は何時のまにか眠りに入つた。

……自分がふうわりと空中に浮んで、それでも全速力で飛んでゆく、いつまでいつても際限のない薄暗い大氣中である、……さういふ自分の姿を私はぼんやり何處から眺めてゐた。私はその時はつきりした意識を持つてゐることを感じてゐた。そしてふと眼を開くと、自分の烏打帽の底の所に濃い黒髪が亂れてゐるのを見た。

私は喫驚して起き上つた。私の空氣枕は、隣りのハイカラな婦人の小形な圓い空氣枕にぎつしり押しつけられてゐた。女の髪が私の枕の上にも散りかゝつてゐた。私は殆んど無意識に自分の枕を手元に引き寄せた。そしてまたそのまゝ横になつて眼を閉ぢてしまつた。闇を突いて疾走する列車の響きが私の半睡の意識を

一杯満たしてゐた。

朝になつて私が眼を開いた時、汽車は丁度國府津に着いてゐた。乗客の多くは睡眠不足らしい眼をたゞぼんやりと開いた。まだ夜からの寢息が車内に生温く滲へてゐた。昨日からのことが意識の奥に茫とかすんで、皆互に何だか物珍らしさうに顔を見合つた。不思議なやうなおかしなものが皆の心に在つた。

國府津を出ると、急に明るい曉の空氣を切つて汽車は走つた。まだ太陽の出ない東の空が紅を呈してゐる。雑木林の間には朝靄が籠めて、地面はしつとりと露に濕つてゐる。平らな平地に青い田圃がうち續く。

車内の空氣が冷たい爽かな朝の氣に満たさるゝ頃、私は身體の節々まではずきり眼覺めてきた。快晴の晝を迎へる喜びが私の胸に上つてきた。

私は顔を洗つて、それから食堂で簡単な朝飯をすました。其處には多くの人が居たけれど、別に氣を止めて互に見合ふでもなかつた。

自分の席に歸ると、安らかな疲労に再び私の眼瞼は重くなつて來た。私は車の動搖に身を任せながらうつら／＼してきた。然しそれは睡眠ではなかつた。眼覺めながら爽かな朝の光りを見ながら、現^まともない惘然たる静けさであつた。そして私はぼんやりと車内の安らかな沈黙に浸つてゐた。

名古屋からすぐ腰掛の上に長くなつた男は、起き上つてまた羽織袴を身につけた。

「よくお眠りのやうでしたね。」と茶色のチョッキの男が彼に話しかけた。

「えい。あなたは？」

「少しは眠りましたが……。」

「はあさうですか。私はどうも汽車の中では不思議によく眠る性分でした。ただ先があればもつとゆつくり眠るんですが。それに平素忙しい身體ですから、却つてかういふ時には晩早くから眠れていゝ位に思ふんです。然し込む時はかな

ひませんな。

「今日のやうにこの列車がゆつくりしてゐることは實際珍らしいですね。」

「まゝさうですよ。所で……。」と云つて彼は大きい金時計を取り出して眺めた。「もう間もありませんですな。」

然し會話はそれきりふと途切れてしまつた。彼はあたりをすつと見廻して、腰掛の上いきちんと身を保つた。實際朝になつて知らない人に話しかけるには、何だか不調和なものが其處に在つた。自分／＼の意識が皆の心に蘇つてくる。そして皆の眼は新らしい聲の方に物珍らしく向けらるゝ。

私は向ふ側の窓越しに東京灣の朝風の景色を眺めやつた。房總の山を離れた太陽の光りが次第に海上の靄を散じてゆく。白い帆を張つた小舟が静に水に浮んでゐる。

傍の色白の商人はもう荷物を纏めて黙つて煙草を吸つてゐた。隣りのハイカラ

—第十六列車—

の婦人は懷中鏡を取り出してしきりに髪を撫で付けてゐた。で私も立ち上つて毛布を疊んだり帯をしめ直したりした。

烏打帽を中折に代へて、ちつと荷物を傍に坐つた時、私は妙に物淋しい感じに打たれた。一昨日からのことが、そしてまた昨日からのことが、遠い過去のやうにしてふり返りみられた。彼方には去つてきた故郷の靜かな地があり、此方には刺戟の多い東京の生活があつた。その間の淋しい間隙には、この第十六列車に乗り下りした人達の面影が浮んでゐた。

車内を見廻すと、乗客は皆手廻りの荷物を腰掛の上に並べて、その側に黙つて坐りながら到着を待つてゐた。皆の心に淡い忘却があつた。そして皆自分／＼のことをぼんやり意識に浮べてゐた。

私は眼をそらして、車窓から立ち並んだ東京の人家の上を見渡した。

やはり私の結婚問題だった。

會社で毎日父と顔を合してゐる筈の田崎老人が、わざ／＼二三回續けて宅に父を訪れて來た時、私は變だなと思つた。それから晩酌の折など(父は自宅で晩酌を取ることは稀にしかなかつたがその頃ではその度数が目立つて多くなつてゐた)、知つてゐるくせに何故か私の年齢をきいてみたり、それとなく結婚の問題を——勿論一般的問題として——話のうちに持ち出してみたりする時、私は變だなと思つた。そしてこの第二の「變だな」といふ感情の下から、私は既に漠然とではあつたが、問題の本體を豫想してゐた。そして、「うっかり出來ないぞ!」といふ氣がした。

田崎老人といふのは、會社の創立當時には給仕をしてゐたさうであるが、その

實直さと勤勉と年功と、それから何よりもその多少愚鈍な無危險性とは、遂に彼を會社の古狸たらしめ、現在の重要な地位を得させたのである。話尾のはつきりした切口上と、頭の低い丁寧さと、いつも古い洗ひ洒しの和服とは、彼を如何にも忠實朴訥な人物のやうに思はせるのであつたが、それだけにまた油斷がならないと私は思つてゐた。何故なら彼のうちには無意識的に阿諛性があつたから。この本人自ら意識しない阿諛性が實直の衣に包まるゝ時、それは最も危険なものになる。——「どんな女を私の嫁にと彼は父に勧めるか分つたものではない。」さう私は思つた。

その上、私はまだ結婚などいふことを念頭にしてゐなかつた。一方には、過去の淡い片戀の失戀と、家産の衰退と、母の死とは、私の心を頑にし、他方には、私の胸のうちに残つてゐる幻のロマンスは、世俗的な結婚に對する反感を私の心のうちに澱ましてゐた。

—亡き母へ—

それで私は、父の言葉が愈々本問題に觸れてきた時も、至つて平氣でゐることが出来た。

「兎に角眞面目に考へてみるがよからう。」と父は云つた。「お前の一生の大事だから、私からどうしろと指圖は出来ないのだが、至極いゝかも知れないと思ふ。然し最後の決定はお前の返答次第だからね。」

「はい。」と私は答へた。

「血統も正しいさうだし、本人も貞淑な上に頭がしつかりしてゐるさうだから。私は黙つてゐた」

「わしも一度その人には逢つたことがあるんだが……。」

「もう逢はれたんですか。」と私は思はず顔を上げた。

「いやなに、わざ／＼この問題のために逢つたんぢやないんだが、その父親とは時々逢ふもんでね。お前も父親の方は知つてる筈だが。」

「何といふ人です?」

「名前はまあ當分預つておかう、今に分るんだから。兎に角實業界では多少名を知られてきた富豪なんだ。」それから父は一寸顔を曇らしたが、私が口を開かないうちにつけ加へた。「向うから田崎を通じて是非にと云ふもんだからね。」

「成金でせう、その人は。」

「まあさう云へば、云へないこともないんだが、家柄も正しいやうだし……。」

父は何かを辯解してゐるやうだつた。けれど私は別にそれを氣にも留めなかつた。そして話はそれきりで済んだ。私は當人の寫眞を父の手から貰つて、自分の室に退つた。

「どうせ駄目だ。」と私は思つてゐた。それで、散歩の折なんか寫眞屋の窓際でぼんやり女の寫眞なんかを見て過ぎるやうな落付いた氣持で、その女の寫眞を眺めてみた。裾模様の着物をつけて胸高の帯に細い金鎖(だと私は思つた)を絡

ませた立姿は、丁度結婚の時のやうな趣きを呈してゐた。私は苦笑した。それから次に、大きい束髪の下から覗いてゐるその顔を注意して眺めてみた。可なりよく整つた顔立だつた。然し人の心を引くやうな魅力は少しも感じられなかつた。これだけ整つた處女の顔にかく魅力の無いことは、少し變な氣を私に起さした。それは極端にとりすぎました故ばかりでもなさうだつた。私はなほよく注意してみた。すると二つの拵へられたらしい點を發見した。一つは眉毛だつた。生きたまゝの眉毛には、必ず何處かチャーミングな線の亂れがあるものである。然しその寫眞の眉毛は、少しも亂れの無い曲線を以てすつと圓く刷かれてゐた。も一つは鼻であつた。生きた鼻は、顔の陰影の中心となるものである。然し寫眞の鼻は、妙に平面的な感じを持つてゐて、真直に通つた鼻筋の線が非常に不自然に見えてゐた。その二つのために、顔全體に妙に生氣が無く、小さくきりつと結んだ唇までが魅力を失つてゐた。

寫眞をみてるうちに、私はいつの間にか不愉快になつた。それで寫眞を投げ出して、机の上にはんやり兩腕をついてゐると、父の言葉が俄に頭に浮んできた。

「父が時々逢ふといふその富豪とは、一體誰だらう？」私は種々物色してみた。

父の知人と云つても非常に數多いので、丸で雲を掴むやうなものであつた。これかと思ふと、また他の者が傍から現れて來た。そのうちに面倒くさくなつた。

私はその問題を頭の外に投げ出して、書物を披いた。

けれども頭が妙に書物に集中出來なかつた。何かゞしきりに私の頭の中に割り込まうとした。「どうせこの結婚は駄目だ。」と私は自ら云つた。「駄目なことは考へるほどつまらない。」とも自ら云つた。然しそのあとから、何か氣懸りなものがすぐに私の心を引きずつていつた。

「すぐに吐き出してしまふに限る。」私は遂にさう心を決めた。そして、翌日父へ不同意の返事をしてしまはう思つてゐた。

所がその翌朝變なことが起つた。

丁度秋晴れの空氣の爽かな日だった。二週間許り曇天と雨とが続いて、家の中の凡てのものから人の心の隅まで、じめ／＼と陰鬱になつてしまつてゐた。其處に突然現れた青く澄んだ空と麗はしい日の光りとは、全く凡てを蘇らせるものだった。私は日向の縁側に寝轉んで畫集を見てゐた。晴れやかな外光のうちに浮き出した三色版の畫面が私の心を囚へてしまつた。

その時父が私を呼びかけた。

「こんな天氣は滅多にない。」と父は獨語のやうに呟いてから私の方へ言葉を向けた。「書齋の古本を室の中に並べておいてくれないか。そしてついでに書棚も掃除しておいてくれるといふね。」

「はい。……今すぐですか。」

「いや後でもいい。」

「それではこれを見てしまつてすぐに致しませう。」

そして私はまた畫集を見入つた。それから畫集の後についてる畫家の評傳を讀むともなく讀み耽つてしまつた。晴々とした氣持が、私をいつまでもさうして日向の暖い縁側に落ち付けさせた。身を動かすのが名残り惜しいやうな氣がした。

どれ位時間がたつたか自分でも分らなかつた。ふと顔を上げると、太陽はもう高く昇つて、庭の隅に散り落ちた銀杏の葉も黄色く乾いてゐた。靜かで晴々としてそして暖かだった。私は畫集を其處に役り出すと、今度は雑誌や新聞などにはぼんやり眼を通してみた。

その時一抹の斷雲が空を流れて、急に日の光りを遮つた。今迄の晴々とした明るみが俄に陰つて、身體が寒くなつた。で身を起すと、すぐに雲は通りすぎて、またばつと明るく暖くなつた。私は父の云ひ付けを思ひ出して、その室にはひつて行つた。

奥の入疊の父の書齋には、背に金文字のはいつた新しい書物の外に、祖父から傳つた和装の古書が、手垢に黒くなつた二つの本箱にぎつしりつまつてゐた。誰も讀む者もなかつたが、兎に角いつまでも保存さるべき家の中の遺産であつた。

襖を開いてその室の中に一步ふみ込むと、私は喫驚して佇んだ。會社に出かけるために背廣に換へた父が、室の中に一杯書物を並べてゐた。父は私をちらと見上げたが、そのまゝ眉根に皺を寄せてなほ仕事を續けた。

「私が致します。」と私は云つた。

「なにいゝ、わしがするから。」

父の聲は妙に語尾がはづんでゐた。

それでも私は、室の中に進んで父の手傳ひをしようとした。すると、父は急に高い聲を出して云つた。

「いゝよ。わしがする。お前は用が多いだらうから。」

最後の一句は、私のうちに反抗の氣を煽つた。

「さうですか。」と私は答へた。

父は眉根に大きい皺を寄せたまゝ、手荒く書物を並べた。私にはそれが投げ出してゐるのとしか思へなかつた。ちつと立つたまゝそれを見てると、胸の中に熱いものが込み上げてきた。私は自分の感情のやり場に惑つた。

やがて書物を並べ終つた父は、本箱を縁側に持ち出してがたつと横たへた。それから室を出て行つた。

「はたきを取りに行つたんだな。」と私は思つた。それから、室の中に亂雑に並べられた古書と、その片隅にぬぎ捨てられた背廣の上衣とを、じろりと私は眺めた。そして室を出て行つた。茶の間で、はたきを手にした父と行き合つた。互に黙つてゐた。

私は自分の書齋にはひつた。心が苛立つてゐた。父の仕打は私に對するあてつ

けとしか思へなかつた。何も自分でしなくとも、妹か女中かにさせればいゝものをとも思つた。私が新聞や雑誌を見てゐたからつて、暫くの間待てないことはあるまいものをも思つた。卓子に腰掛けてゐると、傍の本箱の上のせておいた「女」の寫眞が眼についた。私はそれを手に取つて、室の隅に叩きつけてやつた。それから卓子の上に頬杖をついた。

窓の擦硝子に明るく日が當つてゐた。遠い物音がその硝子に漉過されて、夢のやうな静かなどよみを室の中に送つてきた。ぼんやりそれに耳を貸して、明るい窓硝子を眺めてゐると、いつのまにか私の心も静まつた。

「濟まないことをした。」と私は思つた。たとひ父の態度がどうであらうとも、私はもつと穩かな態度を取るべきであつた。「自分の父ではないか！」

その時、玄關の方に父が出かけてゆく足音が聞えた。耳を傾けてゐると、その足音は玄關前の鋪石の上を遠くへ消えていつた。すると急に家の中がひっそりと

静まり返つたやうな気がした。

何といふことも無い淡い哀愁が私の心のうちに澱んできた。そして私は母のことを思ひ出した。母がゐた頃は、父は温厚であり、私は順良であり、家の中は穩かに整つてゐた。母が死ぬと、凡てが沈鬱な衣に包まれてしまつた。温良な父は憂鬱になり、順良な私は無言になり、家の中に柔かな中心が無くなつてしまつた。そして半年ばかりの後に、父は痲痺が強くなり、私は不遜になつてきた。父と私とは妙に神経質な交渉のうちに顔を合すやうになつた。

母の死後、私への縁談が二三あつた。然し私は笑つてそれを拒絶してきた。所が今度の縁談には妙に執拗なものがあつた。田崎老人の來訪と云い、父の廻りくどい説き方といひ、何だか平素と調子が違つてゐた。

このまゝにして置いては、益々父と私との間が變になりさうに思へた。私は亡くなつた母のことを考へながら、妙に父に對して敬虔な氣持になつた。父が會社

—七き母へ—

から歸つたら、すぐに今朝のことを謝つた上、きつぱり今度の結婚問題にも片を付けようと思つた。そして、立ち上つて室の隅の寫眞を拾ひ上げて、またそれを本箱の上ののせた。

それでも何か、妙に氣に懸つて仕様がなかつた。で私は、思ひ切つて祖母の所へ行つた。妹も其處にゐたが、別に氣兼ねにもならなかつた。私は祖母に今度の結婚をも斷らうと思つて旨を告げた。

「へえ、そんな話がありましたかえ。」と祖母は怪訝な表情をした。「私は少しも聞かなかつたが、綾ちゃんは聞きましたかい。」

「いえ、ちつとも。」と妹の綾子は頭を振つた。

をかしいなと私は思つた。それよりも祖母は猶更いぶかしさうな顔付をした。

「一體どういふ身分の人なんです？」

私はそれで、父の言葉から得た推察を語つてきかせ、また田崎老人のことまでも話してみた。

「へえ、さうですかえ。私には何の相談も無かつたが。」

「一體向うは誰れでせう。お祖母さんにはお分りになりませんか。」と私は尋ねてみた。

「お前に分らないことは猶更私にはね……。」

「兎に角何だか變ですから、きつぱり斷らうと思つてゐます。」

「さうだねえ。」

「それに私はまだ暫く結婚なんかしないつもりです。いゝ加減な知りもしない女を貰ふのも御免ですから。」

その時祖母が何か云はうとするのを押つ被せるやうにして妹が云つた。

「ほんとだわ、それがいゝわ。」

私がちらとその方を見ると、妹は心持顔を紅くした。

—理想の女—

妹の友人を私は三四人知つてゐた。妹はそのうちから私の妻を選みたい心があつた。私も寧ろそれが望ましかつた。そして私達はいつしか、暗黙の間に相通する心持を持つてゐた。私の「幻のロマンス」はそんな所に在つた。然しそれは別としても、今度の話は餘りに變であつた。私は益々拒絶の決心を固めた。

けれどもその日の夕方、會社から歸つて來た父の顔を見ると、開けかゝつてゐた私の心は急に堅く閉されてしまつた。父は非常に力無い沈鬱な表情をしてゐた。濃い眉根を寄せて長い口鬚の下にきつと口を結んでゐた。そのくせ兩の眼には、妙に鈍い光りがあつた。たゞその顔に微笑を浮べなかつたのが私には却つて仕合せだつた。なせなら、さういふ時の微笑を見るに堪へないやうな氣がするのだつたから。然し實は、その微笑のないことが却つて私達には不幸だつたかも知れない。父がもしその時、その顔付のまゝで微笑したら、私は父の前に跪いたかも知れない。

父は黙つて書齋にはひつた。そして恐らく父は、綾子が片付けた古書の本箱を第一に見たであらう。さう思ふと、私の頭には朝の氣持がまた蘇つてきた。どうすることも出来なかつた。

夕食の時、私は黙り込んでゐた。

父は何かとしきりに話題を探してゐるらしかつた。政治、軍事、食物、芝居、さういふことについて父はぼつり／＼口を開いた。そしてその調子からみると、誰にともなく話しかけるやうで實はたゞ私にだけ向けられたものゝやうであつた。で私は簡単に返事をした。然し私が返事をする時、父は妙に黙り込んでしまつた。父は何か心に包んでることがあつて苦しんでゐるのだな、と私は思った。然し私はなほ一層苦しんでゐる自分の心を見出した。

その晩皆で茶の間に集つた時、祖母は私の結婚の話を持ち出した。

「さういふ話があるのですか。」と祖母はきいた。

—じき母へ—

「え、ありますが……。」

父は語尾を濁して、長い口鬚の下に唇をきつと結んだ。

「一體向うは、何處の娘さんですか？」

「まだそれほど進んだ話でもありません。」と父は話頭を轉じた。「まあよく調べてみてから、ゆつくりでも宜しいでせう。」

父は明かにその話を避けたがつてゐるらしかった。然し私は、この機會を逃してはいけないと思つた。それで書齋から女の寫眞を持つて來た。

祖母と綾子とが一緒に寫眞を覗き込んだ。

「綺麗な方ね。」と綾子は云つた。祖母は何とも云はなかつた。

「そのまゝに放つておけばいゝんです。春樹(私の名)がいけないと云へばそれはいゝんですから。」と父は云つた。

そのために私はつい自分の意志を父の前に發表しないでしまつた。父は何かい

らくしてゐるらしかった。寫眞を持つて來たことが父を苦しめたのではないかしら、と私は思つた。然しなせそれが父を苦しめることになるのかしら、とも思つた。そのうちに不愉快になつてきた。私は黙り込んでゐた。父も黙つてしまつた。祖母も綾子も譯の分らぬその沈黙のうちに引き入れられてしまつた。

「お前はこれからどうするつもりだ？」と父は暫くして口を開いた。言葉は落ち付いてゐた。

「どうするつて……。」

「もう大學も卒業したし、いつまで遊んでもゐられないだらうが……。退屈が一番人間にはいけないものなんだ。」

前からのことで私には父の意味がはつきり分つてゐた。それで眞直に答へた。

「やはり文學をやるつもりです。實業界には私の頭は向きませんから。」

「うむ。」父は鼻の奥でさう應じながら、ちつと考へ込んだ。

—理想の女—

—亡き母へ—

「お父さん！」と私は呼びかけた。

「何だ？」

「いえ……」と私は口籠つた。何か云ふつもりだったが、父の凹んだ奥深い眼に出逢ふと、それが頭の外に逃げ出してしまった。

「兄さん旅行なさらない？」と綾子はふいに他のことを云ひ出した。「山はすっかり紅葉でせうね。私日光に行つてみたいわ。兄さんがいらつしやるなら私も行くわ。そしてお祖母様も。大丈夫ね、日光まで位なら。」

「あゝ皆で行くといふね。」と父が云つた。「わしも後から行つてもいいから。」

「だけど私はもう大儀だからね。」と祖母はそれでも笑顔をして云つた。

綾子のその提議は、一時白けた沈黙を救つた。旅のことなんかを皆で話し合つた。いつのまにか父も晴々とした顔に返つた。

けれどもその晩一人になると、私はまた重苦しい氣持に囚へられてしまつた。

父と私とを距てゐる溝渠のことを私は思つた。溝渠の兩岸に立ちながら、父と子といふ關係に於て私達はぢかに顔を合してゐた。それを父も苦しみ私も苦しんでゐた。それはどうにも出来なかつた。然し……「思ひ切つて父に正面からぶつかつていつてみよう。」と私は思つた。「そしたら新しい途が開けるかも知れない。」それには今度の結婚問題はいゝ機會らしかつた。今迄一度も父と眞面目な心の問題を話し合つたことが無いのを、私は苦しく思ひ出した。昔は母が父と私との間に立つて調和をはかつてくれた。私が文學をやることなんかも、皆母を通じてきめたことだつた。母が亡くなつて後は、どんな重大な問題もたゞ二三言ですんでしまつた。父は多くをきかないし、私も多くを云はなかつた。そしていつも問題は、中途半端なまゝ不理解的のうちに残された。「こんな風でゆけるものではない。」と私は思つた。

然し、その翌日も、翌々日も、私は何とも父に云へなかつた。父も何とも聞か

—理想の女—

なかつた。父は非常に氣力が衰へてゐるらしかつた。そしてまた何かいらしくしてゐるらしかつた。その氣持が私にも傳つた。

三日目の晩、父は晩酌を取つた。氣分に何處か張りど餘裕どが出来てるやうだつた。

「おいお前も少し飲むがい。」と父は私に云つた。「酒も飲めないやうでは仕方がない。」

「酒ならお父さんより強いかも知れません。」と私は答へた。

「では今晚一つ太刀打をやるかな。」

父は顔を赤くほてらしてゐた。私もやがて、心臓が熱く動悸してくるのを感じた。

「そんなに飲んでいゝのですかね。」と祖母が云つた。然しその言葉には却つて喜ばしい調子が籠つてゐた。

私は杯を取り上げながらちつと父の顔を見た。

「お父さんは餘り黙つていらつしやるので、私にはお心が分らないで随分困るこどがあります。」と私は思ひ切つて云つてみた。

「さう云へばお前だつてさうだ。わしもそのことは種々考へてみたこどももある。これからは何でも互に理解するやうによく話し合ふことにしよう。」

さういふ父の顔には陰鬱な影はなかつた。私は父の口からその時何かを期待した。けれども父は他のことを話した。政治の内幕だの官吏の腐敗だのといふやうな直接私達に關係の無いことばかりだつた。たゞ一つ父はこんなことを云つた。

「わしは郊外に廣い地面を買ひこんで、其の真中に三室か四室の小さな家を建ててみたいと思つてるがね。家のまはりの廣い地面には、草花を植ゑたり、盆栽を並べたりするんだ。温室もいゝね。そして屋根の上は全部露臺にするんだ。氣持のいゝ屋上庭園といつたやうなものにね。」

—亡き母へ—

それは父の空想だった。私は微笑んだ。

「然しそれも愈々隠退する時のことだ。それまでは大いに働かなくちやいけない。」

「お父さんは人生をどうお考へになります。」

私はさう聞いてみた。然し自分ながらその問ひの餘りに唐突で馬鹿げてるのに氣付いた。然し父は何とも思はないらしかった。

「人生は活動だね。」と父は云つた。「たゞ活動あるきりだ。わしもこれから益々活動するつもりだ。お前なんか少し世の中に出て飛び廻るといふ。」そして一寸父は言葉を切つた。

「さう／＼こないだの結婚の話だがね、あれもどうにかしなくちやなるまい。實は先方といふのは、沼田なんだ。」

「え、沼田さんですか。」と私は聲を立てた。

「さうだ。向うからは是非にといふもんでね。……然しまあどうだつていふさ。放つておけばいゝんだ。」

さう云つて父は急に顔を曇らした。

沼田といふのは私も知つてゐた。元はある會社の會計をしてゐた男だが、戦争のために鐵と船との價が暴騰したに乗じて、一躍成金になりすました男だった。その間には、會社の金を以て不正手段を弄したことがあるといふ話もきいたことがあつた。父の會社の株をも、一時買ひ占めにかゝつたことがあるといふ話もきいたことがあつた。

私は云ひ知れぬ憤懣の情を感じた。すると父は私の顔から眼を外らしながら、押つ被せるやうにして云つた。

「わしもこの縁談は餘り好まないんだが、田崎がうるさく云ふうんでね。……なに氣に入らなかつたらそのうちに斷ればいゝさ、時機を見て。」

—理想の女—

私は父の心に何か苦しいものがあるのを見て取つた。それでまた何にも云へなくなつてしまつた。

父も私も妙に黙り込んでしまつた。

「あゝ久しぶりに酔つたやうだ。もう飯にしよう。」と父は云つた。

その晩私は一人で、「女」の寫眞をよく見てみた。私の眼は執拗だつた。寫眞のとり澄した顔立から、私はその實際の顔を探り出さうとした。全體としては可なり整つてゐた。然しよく見ると、頬が脹れ上つて鼻が平べつたかつた。眼瞼が如何にも薄かつた。そして奥行のない光りの鈍い眼の上には、取つてつけたやうな圓い眉毛がついてゐた。神経の鈍い無知な顔だつた。そしてその側に私は沼田の顔を並べてみた。頭髮の薄い小さな額、脂ぎつた脹れた頬、遠視の眼と團子鼻、而も狡猾さを無理に素朴のうちに包み隠したやうな表情。私はわけもなくいらいらしてきた。然しその苛立ちの底に、私は「女」の唇が淡い自分の情緒を唆つてゐ

るのを感じた。小さく結んだ唇が、脹れた頬の中にぼつりどつついてゐて、誰にも親愛の念を起させるやうな賤をその隅に持つてゐた。それをちつと見てみると、彼女の顔全體に或る心の置けない親しみが漂つてきた。(度々その寫眞を見たせゐかも知れなかつた。)そしていつのまにか彼女は私の心の近くに立つてゐた。それが一方では私の淡い情緒を唆ると共に、一方では私に忌はしい腹立ちを與へた。

私は寫眞を其處に放り出した。そして眼を閉ぢた。すると自分を締めようとする忌はしい眼に見えない糸を感じた。「早くきつぱりと片をつけるに限る。」と私は思つた。沼田はその結婚から何か利益を引き出さうとしてるに違ひなかつた。さう思ふと一方ではその無知らしい娘が可哀想にもなつた。すると私は益々自身に腹が立つてきた。ちつとしてをれなかつた。

窓を開くと、冷たい空氣が私の頬を撫でた。空には星が高く輝いてゐた。その星を見入つてゐると、私の心は深く静まつて、涙の流れるやうなしめやかな氣持

—亡き母へ—

になつた。掴むに掴めない遠い憧れが、私の胸を空しい寂しさで満した。

その翌日、私はまた新しい事實を祖母から聞いた。父の留守をねらつて田崎老人が祖母を訪れてきたさうである。そして沼田との縁組をしきりに勧めていつたさうである。けれどその縁組の裏面には、種々な策略が潜んでるのであつた。

—父の會社は或る社員の不正手段によつて意外に大きな穴が會計のうちに明けられてゐることが發見された。會社に取つては危急な場合であつた。父は重役と相談の上、その危急を救ふために取引所の方へ一杯に手を出した。結果はまだ混沌として分らなかつた。その時に、嘗て會社の株の買占に失敗した沼田が現れてその急を救はうと申し出てきた。それと共に娘と私の結婚の問題も現れてきた。(私の家は古くからの相當な家柄である。) 勿論それらの直接の衝に當つてゐるのは田崎老人であつた。

私はその話を祖母から聞いて、驚いて眼を見張つた。それから頭が熱くなるのを感じた。

「では猶更早くそんな不正な縁談は斷らなければいけません。」と私は叫んだ。

「えい、それもさうですがね。お父さんも心配でせうし……。」

「會社が破産して家の財産が無くなつたつて構はないぢやありませんか。」

「それもねえ……。」

私は祖母の態度に不満だつた。私はそれきりもう祖母には何にも云ふまいと心をきめた。早く父を不正な道から引き出さなければいけない、と思つた。

會社の方のことが自分の力でどうにもならないだけに、また結婚の問題は凡て私の手中にあるだけに、私は一層いら／＼してきた。私は凡てに腹が立つてゐた。その夕方父と顔を合した時、私は眞正面から父の顔を見た。然し父の沈痛な表情を見ると、私の心は堅く扉を閉してしまつた。あゝ、なせ私は父に向つてはかう物が云へないのか!」私は苛立つてゐた。然し私の心は反對に深く／＼縮まつ

ていつた、父の前に、私に血潮を興へた父の前に。否、そればかりではない、父も私の前を避けようとしてゐるらしかった。茶の間に私が坐つてゐると、父は逃げるやうに（と私は感じた）書齋の中にはひつて行つてしまつた。

「私のあることが父を苦しめるんなら私から坐を外さう。」私はそんなことまで考へた。そして夕食がすむと、すぐに自分の書齋に籠つてしまつた。何をすることも氣が進まず、また頭の中がごた／＼してゐたので、私はギリシヤ神話を出して讀んでみた。わりに心が落ち付いてきた。

その晩遅く妹が私の室にはひつてきた。彼女は一寸躊躇した後云ひ出した。

「兄さんはどうなさるおつもり？」

「何を？」

「こんどの結婚のお話。」

「勿論斷るさ。不正なことだから。」

「さうね。それがいいわ。」

それから妹は暫くもち／＼してゐた。私の卓子の上に在る書物を弄つたり、時計を手に取つてみたりしてゐた。がやがて低く呟くやうにして云つた。

「財産なんかどうなつたつていいわね。」

私はちつとその顔を見つめた。彼女はすぐに顔を伏せて續けた。

「お父様とお祖母様と何かお話をしていらしたわ。私屹度今度のことについてだと思ふわ。後で行つてみると、お祖母様は泣いていらしたの。……そんなに何か悲しいことが起つたのでせうか。」

私は何とも答へなかつた。

「兄さんはどうお考へなさるの。……私何だか心配になつて……。」

「今によくなるよ。安心しておいで。それに今晚は一寸忙しいからそんな話はあとにしよう。」

—亡き母へ—

妹は悲しきような眼付をして私を見返したが、そのまま黙つてしまつた。私はまた書物の上に眼を落した。すると暫く妹は私の側に立つてゐたが、それから室を出て行つた。

一人になると私は書物を伏せて、室の中を歩き出した。ちつとしてゐると、何かいけない考へが頭に起りさうで恐ろしかつた。歩いてるうちに、つまらないことに餘り眞剣になりすぎてゐるやうな馬鹿／＼しさを感じてきた。放つとけば自然によくなるだらう、と私は思つた。然し私の心は、反對の方向へぐん／＼動き出してゐた。「やはり父にすつかり心の中をぶちまけてやらう、と最後に思つた。すると心がいくらか安まつた。

けれど、その翌日も、私は父に向つて何とも云へなかつた、またその翌日も。そして自分の心に落ち付きが無くなれば無くなるほど、父や祖母や妹までが沈鬱のうちに落ち付いてゆくやうに私には思へた。

その次の日、父は半頃社から歸つて來た。そんなことはよくあつたので私は別に氣にも懸けなかつた。けれど父は妙なことを尋ねた。

「お前は今日隙があるかね。」

「え、いつでも隙です。」

父はそれきり黙つた。

「何か御用ですか。」と私は反問した。

「いや別に……。」

私はその次の言葉を持つてゐたが、父はふいに向うへ行つてしまつた。

一人其處に残されて、私はしきりにそれが氣になり出した。そしてそれとなく父の様子を窺つてみた。

父は長い間書齋に籠つてゐた。それからまた縁側に腰掛けてゐた。次に、庭の中を歩き出した。そして終りに、庭の盆栽の枝を撓めてみたり、草を取つたりし

た。

黄色みを帯びた斜の日脚が、庭の植込みの木の葉を滑つて、父の銘仙の羽織の背中に明るい班點を拵へてゐた。その日向の班點も動かなければ、身を屈めた父の姿も動かなかつた。あたりは静かだつた。然し父は今しきりに苦しんでゐるんだ、と私は思つた。すると私の心も苦しくなつてきた。私はそれに自分で腹が立つた。怒りの情を父に向つて投げつけてやりたい氣がした。それでも私はちつと抑へた。

四時半頃、日の光りが薄くなつた時、父は茶の間に寢轉んでる私の所へ來た。私達は黙つてゐた。祖母も其處にゐたが、何とも云はなかつた。父はやがて自分で茶をいれて一口すゝつた。それから私の方へ向いた。

「今晚帝劇に行く約束があるんだが、お前も來てくれるだらうね。」
私は思はず起き上つて、父の顔を見た。父はすぐに私から視線を外らして、眉

根に深い皺を寄せた。

「うかど約束してしまつたものだから。」と父は辯解するやうに低く呟いた。
私は直覺的にそれと覺つた。そして我知らず荒々しい聲を立てた。

「沼田さんと約束なすつたんでせう。」

「いや、田崎と。」父の聲は重々しかつた。

「然し結局同じではありませんか。」

一寸それきり沈黙が続いた。私はちつと膝の所を見つめてゐた。そして父も祖母も同じやうに自分自分の膝を見つめてゐることを、私は感じた。私の頭は苦しさと腹立たしさに熱くなつた。そして一時に日頃の鬱積した感情が口から出てきた。

「私は止しませう。そんな見合ひなんか嫌です。私は沼田さんとの縁談は不正な策略の上に成り立つものと思つてゐます。私はきつぱりお断りします。私が自身

—七き母へ—

で田崎さんに逢つて断つても宜しいです。」

「断るんならわしから断る。」と父は聲を立てた。

「ではさうして下さい。」と私も大きい聲を出した。

私達はまた黙つてしまつた。私は身體が震へるのを感じた。その時父は意外にも落ち付いた聲で云つた。

「然し今晚だけは一緒に来てくれないか。後でどうにでも口實はつけられるから。もう約束してしまつたのだ。たとひどうだらうと、免に角約束だけは守らなければ……。」

「それではお父さんだけいらしたらいいでせう。一體お父さんは姑息な手段ばかり取られるから……。」

「いけないと云ふのか。」

私は何とも答へないで父の顔を見返した。眉根にはもう皺が消えてゐた。眉を

擧げた眼が大きく見開かれて空間に据ゑられてゐた。そしてきつと唇を結んでゐた。それを見て私は、父が怒つたのを感じた。その怒りの情が私にも傳はつてきた。

「よし、勝手にするがよい。」

さう云つて父は立ち上つた。私は息をつめた。けれど父はそのまゝ其處に行んでゐた。私は齒をくひしばつた。

「今晚行くのか、行かないのか。」と父はまた嘸鳴りつけた。

私は黙つてゐた。

やがて父は室を出て行つた。

私は思はず立ち上つた。そして祖母が背を圓くして黙つて顔を伏せてゐるのを見ると、私は一層いら／＼してきた。私は帽子も被らずに外に飛び出した。

空が晴れて、地には薄い霧がこめてゐる晩だつた。高い銀行の建物の屋根には暮れ残つた明るみが見えてゐたが、街路には灯が點つて、物影は暗かつた。私は

譯の分らぬ憤りの感情に驅られて歩いてゐたが、その時ふと空腹を覺えた。それで或るレストーランにはひつて食事をした。ウイスキーを二杯珈琲にませて飲んだ。

純白な卓布の上に兩腕をついて煙草をふかしながら、表を走る電車の音をきいてゐると、淡い後悔の念が私のうちに起つてきた。私の取つた不遜な態度は私には眞實なものであつたが、それに責められる心が起つてきた。しきりに父や祖母のことが氣になり出した。それでも私は長い間ちつと身を落ち付けてゐた。

四五人の客がはひつて來た時私は立ち上つた。その時初めて、金入れを忘れて來たことに氣が付いた。幸にもその家がかねて知つてる家だつたので、斷りを云つて外に飛び出すことが出來た。然しそのため私は、泣き出したいやうな心地になつた。すぐに父と和解して、もしよかつたら今から帝劇に行うかとも考へた。

けれども家の中にはひると、頑かたな意地が私の胸の中に一杯根を張つた。

「お前、御飯は？」と祖母がきいた。

「すみました。」と私は答へた。

それから私は茶の間の次の室に身體を投げ出して、女中に夕刊を持つて來さした。書齋に退くことが何故か私は出來なかつた。いら／＼しながら私は父の方へ引きつけられてゐた。茶の間には父が雑誌を見てゐた。片隅には祖母が女中に肩を揉ましてゐた。たゞ妹の姿は見えなかつた。家中が皆黙つてゐた。

父の存在がしきりに氣になつて仕方がなかつた。新聞の上に眼を落しながら、私は心で父の一舉一動を見守つてゐた。父が雑誌の頁をめくる音が、強く私の神經に觸つた。私も手荒く新聞を引つくり返した。その音がまた強く父の神經に觸つたことを、私は感じた。暫くすると、父は茶道具にかたつと大きい音をさした。それが強く私の神經を刺戟した。私はまた新聞を荒々しくめくつた。その音に父

がびりつと頬の筋肉を震はしたことを、私は感じた。それからあたりがしいんとした。それがまた私にはたまらなかつた。私はちつと堪へた。

祖母は黙つたまゝいつまでも女中に肩を揉ましてゐた。心で泣いてゐるかも知れないと私は思つた。私と父とが意地を張れば張るほど一番苦しむのは、家の中で最も弱い祖母だつた。私は我慢しきれなくなつた。

女中に床を敷かして、私は誰にも挨拶せず寝てしまつた。

布団の中に思ひ切つて手足を伸すと、凡てをヂュスチファイする心が私に起つた。「父は決して悪意ではないんだ」と私は思つた。「一家の主人として家の財産を保護したいのは自然に違ひなかつた、特に父のやうな生活をしてる者には。その上父は私にその結婚を少しも強ひはしなかつたのだ。たゞする／＼と引きすられたのがいけないだけだ。恐らく私自身よりも父の方が苦しんだかも知れなかつた。」
「そして今晚は……つまらない意地から大變悪い結果を來しはしないかしら。」

私は起き上つて父の所へ行つて詫びやうかと思つた。然し執拗な意地つ張りの情が胸の中に一杯になつてゐた。父と祖母とがいつまでも茶の間に黙つて坐つてゐることが、一層私にはいけなかつた。私の寢室は茶の間の隣りだつた。私は眼を閉ぢたが、頭はその方へぐん／＼引きづられてゆかれた。父が一寸眉を擡める様までが私の頭にはつきり映じて、それが神経に觸つた。足の先が冷たくひえてゐるのに、頭がわれるやうに熱くなつてゐた。私はわざと大きい音をして寢返りをした。がそれでも足りなかつた。起き上つて行つて、水道の水を飲んだ。私のその一々の運動が父の神経にびり／＼觸つてゐるのを、私ははつきり感じた。そのうちに私は自分で自分の昂ぶつた神経を磨りへらしてしまつた。そしていつのまにか眠りに陥つた。

翌朝眼がさめると頭の心が痛かつた。遅くまで寝てゐた。起き上つた時には、父はもう會社に出かけてゐた。

私は自分が耻しくなつた。誰にともなく後めたく耻しかつた。それで祖母の前を避けた。祖母はしきりに私に何か云ひたさうであつたが、私が逃げるやうにするので、前夜のことは一言も云ひ出さなかつた。

その午後父は會社から電話で、歸りが遅くなることを知らしてきた。私の心は暗くなつた。何か取り返しをつかないことをしたやうな氣がした。然し、夜遅く父が歸つた來た時、私はどうしてもその前に出られなかつた。

その翌日も同じやうな日が過ぎた。私は家の中で神経を緊張させながら、誰にともなく用心をしながら、すつかり疲れ切つてしまつた。『どうにかしなければいけない!』さう私は考へた。けれども執拗な自分の神経をどうすることも出来なかつた。私は父や祖母の前を避けながら、父や祖母の方が一層私より執拗だとも考へた。

次の日、父は二時頃に歸つてきた。私は庭にゐた。すると茶の間で祖母に話してゐる父の聲が聞えた。

「安心して下さい。うまくゆきました。」その次は一寸聞き取れなかつた。「うまく當つたのです。會社ももう大丈夫です。……春樹は何處にゐます?」

父の聲は快活だつた。私は飛上つた。そしていきなり茶の間に向け込んだ。父がちつと私の顔を見た。

「お父さん!」その先は言葉が出なかつた。眼に一杯涙が湧いてきた。私はそれをまぎらすやうにして頭を下げた。祖母が鼻をすゝつた。私は堪へられない自分の感情を抑へつけて、ちつと立つてゐた。その時、父が兩腕を胸に組んでゐるのに私は氣付いた。それで初めて頭を上げて父の顔を見た。私には父が急に年取つたやうな氣がした。

原

尊

私は逃げるやうにしてその温泉にやつて行つた。もし亡命といふ言葉からその大袈裟な俗なニアユンスを取り去り得るならば、私は其處に亡命して行つたのである。そして十日餘り、齒の抜けたやうな感じのする日を過した。さうだ、何か私の心のうちから抜け落ちてゐた。そのものを、私は東京の眩^{めまぐ}しい生活のうち^ちに落して來たのである。私の身體のうちの何處かの釘が一本抜け落ちて、其處からがた／＼と私の肉は壞れさうであつた。

大仁で汽車を捨て、一筋の下田に通ずる街道を、伊豆の圓みのある平凡な山の間を縫つて、遅いそして街道の石ころに揺れる俥に乗つて、四時間もの間私はぼんやり眼を開いたり瞑つたりしてゐた。そしてこの温泉宿の一室に辿り着い

た時、私はほつとした。そのほつとした感じは、堪まらなく白けきつた淋しいものであつた。

温泉と云つても、街道に沿つて二三十軒の人家が集つて漸く宿場^{しゆくば}らしい趣きを作つてゐる處から、少し側^{わき}にはいつて、溪流の岸に二軒湯の宿があるきりのものであつた。宿の門を出ると、農家の素朴な藁屋根が田畑の間に散在してゐた。其處の庭の日向に遊んでゐる小供等が、妙な眼付をしては私をちら／＼眺めた。それでも、天城山の狩獵の折には世に有名な人達がやつて來るさうである。物馴れない女中が食事の時に私にさう話してくれた。その女中は、伊豆の西海岸の漁師の娘で、この宿に來て遊び半分に働いてゐた。

障子を開いたまゝ室に寝轉んでゐると、すぐ下を流るゝ溪流の向ふの低い山の杉の木立の上には、青い空が、妙に平つたい感じのする伊豆内地の空が、靜に懸つてゐた。その空をぼんやり眺めてゐると、私の耳に響いてゐた溪流の水音も、

いつのまにか空の中に吸ひ込まれてしまつて、私の前にはたゞ何物もない空間のみが残つた。その空間に向つて直接に自分の心を露はに曝し出すと、それは何とも云へない静けさであつた。一筋の糸に千斤の重みを吊したやうな静けさだつた。一寸何かを動かせば、静かな呼吸を一寸亂せば、その糸は忽ちに切れて轟然たる變動が起りさうであつた。

獨り空間に向つて自分の心を露はにさらけ出す時のこの不安でそして安定な静けさは、何處から來るものであるか？ さう思ふ時にはもはやその静けさは破られてゐた。空しい空間のうちにざわ／＼と物の影が立ち罩める。自分の過去の生涯の影だつた。自分の後ろに引きすつてゐる過去の影だつた。その影をちつと見つめてゐると、過去の象がまざ／＼と見えてきた。母の臨終の冷たい顔、家産整理の中に出没する冷たく鋭い眼を持つた幾多の顔、生木の枝をぶち切るやうにして別れた女の顔……。

ふと氣が付くと、空はいつしか私と離れて向ふの山の上に静かに遠く懸つてゐた。そして迷ひ兒になつたやうな心地が私に還つてきた。祈らんとして祈り得ない心地が私に還つてきた。還つてくるといふのは、遠い前に、恐らくこの世に生れぬ先に、私はさういふ感情に親しかつたことがあるのだから。そしてそれが其時遠い空間から私に投げ返されたのだから。

ふとふり返つて見ると、室には私の外に誰も居なかつた。そして私の周圍に在るものは、床の間の南畫の掛物と、その前の野菊の投げ挿しと、鴨居の書の額と、四角い大きな火鉢とその上の鐵瓶と、茶盆と菓子器と、それから衣桁とその隅の私の少しの荷物と、たゞそれだけであつた。そしてこの「それだけ」といふのは何時までたつても何物も増さない「それだけ」であつた。吾々が普通云ふ「それだけ」といふ言葉は、その瞬間のみを指して云ふ言葉であつた、遂には何物かゝ加はつてきてそれだけでなくなるといふ豫想、暗黙の豫想、が底に潜むを常とす

る。本當の「それだけ」といふことは中々感じられるものではない。然し私がその時感じたものは本當の「それだけ」であつた。……凡てがさうであつた。「——だけ」で規定され得るものばかりであつた。ふり捨てて來た過去も、自分の肉體も、自分の生命も、また明けて暮るゝ日々も。凡てがはたと行きづまつて、「——だけ」にぶつかつたのである。

「——だけ」といふ状態には何の目的も存在するのを許されない。私はよく、ただ何のあてもなくぶら／＼と外を歩き廻つた。

街道を下田の方へ向つて辿ると、道は軽い上りになつてやがて高原らしい野のうちうねつてゐた。野の中に一本高い松の樹が聳えて、天城山から落ちて來る風に吹かれて震へてゐた。その風に乗つて天城山の頂からは、小さな雲の塊りが西へ飛んで行つた。私は草の上に屈んで煙草をふかしながら、その雲の行方を見守つた。雲が太空を横ぎつて、やがて眞上來、それから西の方に流れ去つてゆ

くのを見ると、私の心も妙に空洞になつてゐた。そして空洞な心のうちに空しい言葉が響く……。

草の葉がそよ／＼と私の脛を撫でる。顧みると、羽の黒い甲虫が一匹匂ひ出して來て草の葉にとまつてゐた。私は立ち上つて、それをぐじりと下駄の下にふみ潰してやつた。さうして一匹の虫の命が絶たれたが、それは何でもなかつた。廣い野の上に草の葉が一つ戦いだほどの音も立てなかつた。その死骸は雨に打たれてその土地を肥すであらう。そして草を生やすだらう。草の下には同じやうな虫が匂ひ廻るであらう。

私は立つたまゝの足を、ぼんやり運んだ。勝手にそしてたゞ鼻の向いた方向へ足を運ぶことには、何等の努力もなく何等の疲労もない。長い間私はさうして歩き廻つてから、宿に歸るとすぐに湯壺に下りて行つた。誰も外に人の居ない湯壺の中に身體を長くしてゐると、平らに湛へた重みのある湯が私の身體を靜かに浮

かしてくれた。擦硝子の窓からさし込む晝の明るみが、湯を、私の身體を、一抹の青い色に暈^{ほか}してくれた。

浴後、私はよくその裏口からそのまま河原に出た。圓い石の一面に轉がつてゐる上を、下駄ばきのまゝ歩き廻ると、その自分の足音と側を流るゝ水音とが同じ氣分のうちに融け合つた。そして私は長い間、その向ふにつき出た岩の上に腰を下して、瀬をなして流れ下つてはまた急に深い淵を作つて澱み返る水を眺めてゐた。河原の上には鶴鴿が飛んで来て、尾をしきりに動かしてゐた。石を拾つて投ると、鳥は水中に一つぼつりと突き出た石の上へ逃げた。がまた暫くすると平氣で近くまで飛んで来た。

「あの女にもこのやうに石を投げたら」と私に妙にぼかんとした心で思つた。

あの女といふのは、前に云つた伊豆の西海岸からその宿に来て働いてゐる女中のことである。彼女の眼が鶴鴿の姿とそっくり似てゐた。眼と鶴鴿とをそのまま

比べるのは一寸變に思へるかも知れないが、その時その場所で、その二つのものの與へる感じは全く同じだつた。宿にはも一人女中が居たが、私の用を足してくれるのはいつもその「鶴鴿の女」だつた。圓みがうつた顔に、ぼつりと清く澄んだ眼を見開いてゐた。その眼には、時としては何も知らない處女のやうな清らかな輝きがあつた。また時としてはもはや幾度も自ら貞操を弄んだものゝやうな揺らめく輝きがあつた。その二つを交々^{こまごま}眼の中に露はしながら、彼女はいつも女中でなしに單なる娘らしい姿を保つてゐた。そして時々野菊の花を持つて私の床の間の花瓶に投げ込んでいつた。全くそれは活けるのでなくて投げ込むのであつた。何かを尋ねても、たゞ「はい」とか「いゝえ」とか答へるきりで黙つてゐる時もあるれば、また向ふから微笑みながら私に何かと話しかけることもあつた。

で彼女が床の間の花瓶に花を投げ込んで出て行つた後、私はどうかすると妙にぼかんとした白痴のやうな心で、彼女の姿を思ひ浮べてゐた。どうにでもなりさ

うであつた。私の心はどちらへでも一寸指先で押せばすぐに轉りさうであつた。それでゐても如何にも落ち付いてゐた。あるだけの状態のうちに落ち付いてゐた。

私が、彼女に石を投げたらと思つたのは、鶴鴿が飛び歩いてゐたからである、鶴鴿に石を投げてみたからである。が一度と鶴鴿に石を投ずるのも臆劫であつた。私はまた眼を溪流の上に向けた。水は青々として淵から溢れ出ては、白い水沫を立て、岩にぶつかりながら、急湍をなして流れ下つてゐた。その水には、地下から湧き出る礦泉も交つてゐるのであつた。その湯の出る所は流れの向ふの小山の麓にあつて、流れの上に架せられた竹の筒で宿に導いてあつた。

私はその湯の湧き出る所へも行つてみた。宿から少し上の方の橋を渡つて、向ふ岸の流れに沿つて小道を下ると、其處に出るのであつた。木の杵が地面に埋めてあつて、上には重い板で蓋がしてあつた。その蓋を開けてみると、ふつと温い礦物質の臭ひが私の顔を打つた。試みに指先を差し入れてみると、湯は一分間位

は手をつけて居られさうに思へる位の熱さだつた。杵の底の火山灰らしい泥の中から、盛り上るやうにして湧き出てゐた。

私は暫くちつとそれを眺めてゐたが、やがてまた元のやうに蓋をして、その上に腰掛けてみた。腎の下から、かすかに温みが私の身體に通じて來た。すると何とも云へない淋しい氣になつて、私は顔を膝頭にもたせたまゝ其處に蹲つてしまつた。

地下深くから湯は絶えず湧き出てゐた。そして私の身體にその温みを傳へてゐた。私を感じたのはたゞそれだけだつた。然し私はまた反對のことを心に浮べてゐた。湯が全く涸れた時のことを、そして今むく／＼と動いてゐる火山灰が冷たく静まり返つた時のことを。その間には何の聯絡もないが、その二つのことが、ぼつりと私の心に浮んでゐた。一は生であり他は死であつた。死の冷たさは私の掌にまだ残つてゐた。底の知れないやうな冷たい母の死骸を私は自分の手で觸つた

のである。

病院の白いベッドの上のあの残酷な鬭争と、それに一線を劃した後のあの底知れぬ静けさ。その二つが、あの瘦せ細つた母の身體に絡みついたことは、それが殆んど一線を劃する間もないほどの瞬間を措いて起つたことは、私にとつて全く一の不可思議であつた。そしてそれは母の身體に取つて直接の變化であつたと共に、母から生れた私にとつても、何時までも生々しい打撃であつた。

父の死後母一人で家政のことをやつてゐたしまた店の監理も母一人でやつてゐたので、母亡き後のそれらの始末は全く複雑を極めてしまつた。母の葬儀から引續いてそれらの事件が漸く終る頃には、萬事を叔父に任して傍觀してゐた私も、全く疲れ切つてしまつてゐた。私はそれらのことがすむと共にあの女とも別れた。凡てから逃げ出したかつたのである。そして凡てが終つた後に私はそれから逃げ出してこの温泉に來たのである。終つた後に逃げ出すといふことは、理論上矛盾であらうとも、實感の上に於て眞實だつたのである。然し逃げて來ながら、私はやはり凡てを自分のうちに持つて來た。それはもう煩はしい紛糾ではなかつたが、石のやうに堅いごろ／＼としたものになつてゐた。それが私のうちで重くがらからと音を立てゝゐた。その石の冷たさに、あの母の死骸の底知れぬ冷たさが纏つてゐた。それらが私の産みの母である、私の自分の過去である。

地下から湧き出る礦泉の温みが、腰掛けた厚板の蓋を通して私の身體に傳はつて來た。その温みが私の荷つた冷たい石にまでも傳はつてくる。私はそして自己を訶むやうな涙を流した。その涙を自分の頬にまで感じた時、私はもうどうしていいか分らなかつた。私は髪の毛を兩手にかきむしりながら立ち上つた。そしてむやみと歩き廻つた。

然しながら歩き廻つてゐるうちに、私の重荷はまた元の石ころに返つてしまつた。さうなるのが本當だつたのだ。そして道で、杖をついて荷物を背負つてゐる老

婆に出逢ひ、また路傍に咲いてる黄色い花を見たが、それらは私にとつてはやはり路上の石塊と何等の擇ぶ所もなかつた。そして自分の室に歸ると、そのまゝごろりと私は身を投げ出した。私の前にはかの静かな空が懸つてゐた。溪流の音も私の頭を亂さなくなつた。

けれど夜になると、私の眼には種々な物の象がちら／＼した。それは何とも捉へ難い單なる幻の線であつた。そしてまじ／＼と洋燈の光を見つめてゐた。すると時々、鶺鴒の女が茶と菓子とを運んで来てくれた。客が少ない期節なので、非常に隙らしかつた。

「ほんとにお静かでございますね。」

彼女は滑かな東京辯を使つた。

「一人でちつとしてよくお體屈でありませぬわね。」

長い間を置いて彼女はまたさう云つた。私は苦笑した。そして何かたゞ口の先

だけで彼女と少し話をした。たゞあの二つの輝きを交々現はす彼女の眼が私の胸に觸れた。然し彼女が室から出て行つた後、私の心はまたぼんやりしてしまつた。私の心は少しもごちらへも轉がり出してはゐなかつたのである。その不安なやうな静けさが、夜の闇と共に私のまわりに在つた。私は早くから床にはいつて寢てしまつた。すぐに眠る代りに朝は早く眼が開いた。椽側に立つて溪流の上の清らかな霧の交つた空氣を吸ふと、それからまた眠くなることもあつた。

或る朝、いつものやうに早く眼を覺すと、東に面した窓に何やら淋しい明るみがあつた。窓は夜も戸を閉めないで眠つてゐたのである。床の中で、ぼんやり眼を覺まして寢返りをする時、すぐ私の顔の前に、その窓の障子に當つてゐる明るみがあつた。まだ椽側の戸を開けてない夜のまゝの室の空氣に、その明るみが反映して、云ひやうのない佗びしさがあたりに立ちこめてゐた。丁度雪の降つた早朝に窓にさす雪明りのやうな明るみであつた。眠りからさめたばかりの眼にその

窓をふと認めると、私は夢遊病者のやうにすつくと立ち上つた。窓に人の頭のやうなものがかすかに影を投じてゐたのである。が立ち上る瞬間にその幻は消え失せて、後には青白いそして消えかゝつた蠟燭の光のやうな淡い明るみのみが残つてゐた。私は一寸起き上つたまゝ立ちつくしてゐたが、やがて其處へ歩いて行つて窓を開けてみた。外には何物も無かつた。朝の靄が森や山の上を一面に蔽ひ被さつたまゝ、東の空が仄白く明けそめてゐた。そしてその上に、淡い弦月が懸つてゐた。窓の妙な明るみはその月の光りのせいであつたらう。私は長く窓にもたれたまゝ、その消えかゝつた月の光りをちつと眺めてゐた。凡ての感動を、恐らくは儂い憂愁をも、取り落してしまつたやうなその月の淡い光りが、その時の私の心には餘りに當然に餘りに至當に映じた。そして見る／＼うちにその光りが薄らいで、爽かな朝の明るみのうちに呑み込まれやうとする時、私は急にまた窓をしめて床の中にはいつてしまつた。そして私はまた眠つた。眠りのうちに初め見た人の頭の影のやうな幻が私の頭に浮んできたらしかつた……。

その朝本當に起き上つた時、私はそのことを思ひ起した。そして空を仰いでみると、やはり月が薄く東の空に残つてゐた。然し何だかそれは夢だつたやうな氣がしてならなかつた。始終聞えてゐる溪流の音が、その出来事に少しもはいつて来ないであるのが不思議だつた。その出来事の間、全く空虚な静けさが深く澱んでゐたことを私は記憶してゐたのである。茲にそれを出来事と稱したら人は笑ふかも知れない。然し私にとつては、どういふものかそれは忘れることの出来ない出来事だつたのである。

然し溪流の音を全く耳にしないやうなことはよくあつた。それに氣がついて、變だなどと思ふと、急に激しい水音が耳にはいつて来るのであつた。

私は覺えるともなくその附近の道は、畑の間をぬけてゐる小道までも覺えてしまつた。そして安心しきつたやうな風で、それらの道をよく歩き廻つた。或る時

町——と云つても二十軒ばかりの人家の並んだ町を通つて、暫く向ふの山の方へ田圃の中を歩いてゐると、私は始終口の中で「雜貨商小林みね」とくり返し呟いてゐるのに氣がついて喫驚した。何でもその看板を町で見かけたのであつたが、私はそれを何度も口の中でくり返し呟いてゐたものらしい。そしてそれも別に記憶に入れやうとするつもりでもなかつたらしい。試みに私はまた「雜貨商小林みね」と口の中で呟いてみた。すると、その言葉が機械的に頭の中からびんとはね飛ばされた。頭は何かで一杯になつてゐたのである。私はその何かで一杯満ちて固くなつてゐる頭に「雜貨商小林みね」をぶつつけて、それがびんとはね飛ばされる妙な面白さを我知らず味つてゐたものらしい。

「馬鹿！」と私は自分に云つてみた。すると妙に白け切つた氣持になつて、私はぐつと唾液を喉にのみ込んだ。そしてまた一人で「雜貨商小林みね」が私の口の中で呟かれた。

室の中に寝轉んでゐる時なども、何か或る短い文句を我知らず幾度も口の中でくり返してゐることにふと氣付くことがあつた。神經衰弱のせいか、または身體が餘り疲れ切つてゐるせいだらうと、私は考へた。

そしてそのままの静かな日が、明けてはまた暮れた。或る時、例の女中にもう來て幾日になるかと私は尋ねてみた。

「随分呑氣ですわね。丁度十一日よ。」

彼女は小首を傾げながらさう答へた。

「十一日と、もういゝだらう。」と私は思つた。何がいゝのか、それは私にも分らなかつた。

私は急いで仕度をしてまた東京に歸ることにした。來てから十二日目の朝、私はその宿の前から、自分の小さな鞆と共に俥に乗つた。その時私は、非常に曲線の多い揺らめき方をした「鶴鴿の女」の眼の輝きを見た。そしてその眼を自分の

前に据ゑながら、私は俵の中で「十二日、十二日」とくり返し呟いてゐた。

凡てが自然だつたのだ。自然に来て、自然にまた歸つてゆくのであつた。そして何時のまにか自分の荷つてゐた堅い石ころが何處かへ置き忘れられてしまつたやうな氣がしてゐた。その代りに頭が一杯に堅く石のやうになつてゐた。その頭に凡てのものがぶつかつては、心地よくはね返されてゐた。大仁についた時、私は小さな停車場の中をぐるりと見廻してみた。新らしい殖民地に行つたやうな氣がした。そして其處の待合室の腰掛に坐りながら、私はまた「十二日」を頭にぶつつけてみた。するとふと、「鶺鴒の女」の眼が私の心に浮んで來た。私はまた急にぼんやりと驛内を見廻してみた。

そして私は白痴のやうにぼかんとしながら汽車の出るのを待つてゐた。がまたも一度あの温泉に歸らうかとも思つた。十二日目といふのは何だか日が善いやうな氣がした。日が善いから却つて、東京へ歸らうかそれともまたあの温泉へ歸ら

うかと、思ひ惑つた。私は暫く切符を買はずにそれを思ひ惑つてゐた。然しまたどうでもいゝやうな氣もしてゐた。そして妙に胸苦しさを覺えて、額に手をやつてみると、少し熱もあるやうだつた。其時誰かゝ何かを私に命ずるとしたら、私は唯々としてその命に服したであらう。死ねと云へば死んだかも知れない。

.....

理想の女

私は遂に秀子を殴りつけた。自然の勢で仕方がなかつたのだ。

私は晩食の時に酒を少し飲んだ。私達は安らかな気持ちで話をした。食後に私はいゝ氣持になつて——然し酔つてはゐなかつた——室の中に寝轉んだ。電燈の光りを見てゐると、身體が非常にだるく感じられた。秀子は室の隅の小さな布團に、みさ子を寝かしつけてゐた。その方へ向いて私は、「おい枕を取つてくれ」と云つた。

「しッ！ 赤ん坊が寝ないぢやありませんか。」と秀子は答へた。

彼女の聲の方が私のよりずっと高かつた。眠りかゝつた子供が眼を覺したとすれば、それは寧ろ彼女の聲のせいに違ひなかつた。然し幸にも子供は眼を覺さなかつた。私は我慢して待つてゐた。所が秀子はいつまでも起き上らうとしなかつ

た。私は雑誌を五六頁讀んだ。それから秀子の方を見ると、彼女は子供に乳を含ましたまゝ、いつしか居眠つてゐらしかつた。

私は立ち上つて、押入から枕を取り出した。そして押入の襖をしめる時、注意した筈だつたが、つい力が餘つて大きな音がした。秀子はむつくり半身を起した。そして、「靜かにして下さいよ、」と云つた。

その言葉の調子が如何にも冷かに憎々しかつた。私は癪に障つた。それで、また例の通りだとは思ひながらも、其處にどたりと枕を投なり出して、わざと大きな音がするやうに寝轉んでやつた。

「赤ん坊が眼を覺すぢやありませんか。」と秀子は云つた。「眼が覺めたら寝かして下さいますか。」

「ではなせ枕を取つてくれないんだい。」と私は答へた。

「それ位御自分でなさるのが當り前よ、私ばかりを使はなくつたつて……。」

「ぢやあお前は、いつも使はれてる氣で僕の用をしてるのか。心からかうしてあげやうといふ氣はないのか。」

「では御自分はごうなの。子供で手がふさがつてゐるからといふ思ひやりは、少しもないんですか。」

さういふ水掛論が喧嘩の初まりだつた。然しそれは具體的な事實を離れて、お互の態度に及ぶ抽象的な問題になつたため、どちらも云ひつゝのるだけではてしなかつた。そして口論の最中に、俄に沈黙が落ちて來た。苛ら立つた憤りが、ぢり／＼と胸の奥に喰ひ込んでいつた。……とは云へ、いつもならそれきりで済むのであつたが、不幸にも、丁度その時速達郵便が玄關に投げ込まれた。「速達！」といふ配達夫の聲に、「はい」と秀子は答へたが、立つては行かなかつた。

その様子と、「はい」といふ返辭の落付いた調子とに、私は赫となつた。「取つといで！」と私は怒鳴つた。

秀子は黙つてゐた。

「取つといでつたら！」と私はまた怒鳴つた。

秀子は眉根をびくりと震はしたまゝ、ちつとしてゐた。私はちつとして居れなかつた。枕を手に取るが早いか、それを秀子めがけて投げつけた。枕は的を外れて、椽側の障子に當り、障子の中にはまつてる硝子一枚壊した。その物音に、みさ子が泣き出した。秀子はそれを抱き取つた。私は眼をつぶつて仰向に寢轉んだ。硝子の壊れた音を聞きつけて、臺所からはるがやつて來た。秀子ははるに硝子の破片を掃除さした。そして、はるが向ふに立つてゆき、子供が眠つてしまつた後、秀子は私の方へ坐り直して云つた。

「あんな野蠻なことをなすつて、もしみさ子が怪我でもしたらどうします！」

私は飛び起きて、齒をくひしばつた。掃除がすみ子供が眠つてしまつてから、冷かに眞劍に談判を初めたのだ。彼女はまた云つた。

「卑劣な！ご自分に恥ぢなざるがいよ。」

その言葉を聞いて私は我を忘れた。「自分に恥ぢるがいよ」とは、私が彼女を責むる時によく用ゐた言葉である。その言葉が如何に苛ら立つた心を刺戟するかを、私は初めて知つた。私は身體を震はしながら、右の拳を振り上げた、そして叫んだ。

「何だ、も一度云つてみる！」

「え、幾度でも云ひます。」と彼女は甲走つた聲で答へた。「卑劣です、野蠻です。私を打つつもりなら、打つてごらんなさい！」

私は振り上げた右の拳を打ち下し加減に、彼女の肩を押して突き倒さうとした。彼女はその手にしがみついて來た。もう仕方がなかつた。取られた手で彼女を其處に引きすり倒し、左手で彼女の頬に一つ強打を喰はし、立ち上りさま、彼女の腰のあたりを蹴飛ばした。彼女はがくりと疊の上は倒れ伏したが、その執拗な

手先はなほ私の着物の裾に取りついてきた。私は彼女が理性を失ひかけてるのを見た。それに反して、私の方には非常に明晰な意識が働いてるのを見た、私は堪らなくなつた。そして彼女の狂暴な手を拂ひのけるや否や、ぶいと外に飛び出した。子供の泣き出す聲が後ろから聞えてゐた。

實に嫌な——といふより寧ろ醜い心地だつた。彼女を殴りつけてる瞬間の自分の姿が、如何に呪はしい様子であつたかを私は感じた。「随分大きな口ね、」と彼女からよく云はれてゐたその口が、殊に大きく裂け上り、鼻が頑丈に居据り、兩眼が真中に寄つてゐたに違ひない。握りしめた拳は震え、呼吸は氣味悪いほど深く抑へ止められてゐた。そして、さういふ私が飛びかゝりていつて殴り倒したのは、「彼女」をではなくて、「彼女の肉體」をであつた。柔かな圓つこい弾力性のある、くさくさ海綿を水母に包んだやうな、而も生温い香りのする、「彼女の肉體」をであつた。その肉體の背後には、執拗な「彼女」がつゝ立つて、あくまでも私に反抗しやう

としてゐた。私の手先にしがみつき、私の着物の裾に取りついて、嗔恚の爪を私の胸に立てやうとしてゐたのだ。私は逃げるより外に仕方がなかつた。逃げる——と云へば、私は初めから逃げ出してゐたのだ。切端つまつた場合になると、暴力が最後の避難所となることもある。私は拳を振り上げた時、「も一度云つてみる！」と叫んだ時、彼女が折れて出ることをどんなにか待つてゐたらう！ 恐れ入つたといふ色を一寸見せてさへくれたら……もう止して下さいといふ様子を一寸見せてさへくれたら……振り上げた拳の下から一寸身を引いてさへくれたら……私の氣はそれで済むのであつた。然し彼女はさうしなかつた。あべこべに私の氣勢を上から押つ被さつて折り拉がうとした。それでも私は、拳をすぐに打ち下さないで、少し手を引いてたゞ彼女を押し倒さうとしたのである。然し彼女はそんなことに頓着しなかつた。真正面から私に向つて突進してきた。凡ての期待は空しくなつた。私は逃げ途を失つた。もはや一方の血路を開くより外には仕方が

がなかつた。私は殴りつけた、蹴飛ばした。而も、私が其處に打ち倒したものは「彼女の肉體」であつて、「彼女」はあくまでもいきり立つて私に飛びついて來たではないか！

さういふ彼女を、一步も譲ることを知らない彼女の心を、是非とも挫いておく必要があると私は考へた。さうでなければ、まだこれから幾度も同じことが起りさうだし、その度毎に私は益々困難な立場に陥りさうだつたのである。些細なことから私達は口論をすることがよくあつた。二三日後まで反抗的な沈黙を守るほど激しい口論も、何度かくり返されてゐた。所が此度さういふことが起つたら、もう掴み合ひに終るの外はないやうに思はれた。幾度も抑へに抑へられた暴力が、既に飛び出した後だからである。而もさういふ暴力の結果はどうか？ 責任が私一人にかゝつてくるのみである。彼女は「女である」といふ便利な楯を持つてゐる。一步も譲らないで私につゝかゝつて來たこと、不條理に苛ら立つてき

たこと、さういふ微細な——實は最も重大な——問題は、「殴られた」といふ事實の背後に影を潜めてしまふ。そして「女を殴つた」といふ責任が全部私の上ののしかつてくる。喧嘩の瞬間には、男も女も對當に——否多くは女の方がより攻勢的に——相對向するものであるといふことを是認しても、殴る殴られるといふ結果の差は、溯つて男を非難しがちである。動機の如何に拘らず、強い方が不當だと常に結論されがちである。私はさういふ不條理な損害を受けたくさい。さういふ危い境地へ踏み込みたくない。それには、彼女に折れ屈むことを教へて置かなければいけない。彼女の心を挫いて置かなければいけない。

憤激の餘り私は右のやうに考へた。然しこの決心は如何に根の浅いものであつたか！ 私は頭で到達した歸結に満足して、それを胸の奥に移し植ゑるだけの勞を取らなかつたのである。

二日間、私達は互に口を利かなかつた。その間私は、一方では秀子に對する憤りを無理に自ら煽り立てながら、一方では秀子が我を折つてくるのを待ちあぐんでゐた。

二日目の夕方——その日は冷たい雨が午後から降り出してゐた——私は、まだ電燈もつかないのに、秀子が椽側の雨戸を閉めてゐるのを見た。室の中が眞暗になりさうだつた。

「も少し開けておき！」と私は尖り聲で云つた。

「みさ子が風邪をひくぢやありませんか。暗くても温い方がよござんす。」と彼女は答へた。

私が枕を投つて壊した障子の硝子は、まだそのまゝになつてゐた。私への見せしめか知らないが、彼女は新たに硝子屋へ頼むこともせず、または紙をはつて一時の間に合せることもしなかつた。ばかりと口を開いてる四角な穴からは、冷かな空氣が流れ込んでくるやうだつた。

「硝子をはめさしたらいゝぢやないか。」と私は云つてやつた。

秀子は何とも答へないで、「雨戸を閉め切つてしまつた。室の眞暗な中に、私は一人置きざりにせられたやうな氣がした。その時電氣が來た。俄に明るくなつた。私達は互の視線を避けた。すると——あゝ、女のでたらめな口先よ！——秀子は急にかう云つた。

「硝子をはめさしても宜しいんですか。」

「はめないでどうするんだ！」と私は答へた。

「ぢやあなせ早く仰言らないの。」

「お前の方が黙つてるぢやないか。」

何だか馬鹿々々しかつた。馬鹿々々しい氣持ちが動いてきた。そして、それが喧嘩の終りだつた。私達はまた口を利き出した。萬事が平素の状態に返つた。その上、この餘りに妥協的な不自然の和解は、感覺の陶醉によつても助けられたのである。

斯くて私の決心は、いつのまにか泡沫のやうに消え去つてしまつた。消え去るのが當然だつた。私の内心は寧ろそれを望んでゐたのだから。私にとつては、彼女の性質を矯正したいという欲求よりも、彼女を所有したいといふ欲求の方が、より直接でありより強いのであつた。そして、彼女を殴つたことによつて、私は結局彼女に武器を一つ多く與へたのみだつた。

秀子は私に右の頬を殴られてから、その奥齒が痛んで止まなかつた。——彼女は美事な齒並を持つてゐた。上下揃つた細い眞白な齒並で、而も下齒が上齒の奥にはいり込んで合さるといふことがなかつた。上齒の先端と下齒の先端とがいつもかち合つてゐた。そのために、物を食べる時奥齒を噛み合わせるのに、口元へ可愛らしい皺が寄つた。またそのために、平素唇が薄く細そりして見え、その唇の仇氣ない子供らしい微笑の隙間から、上下揃つた美事な齒並が覗き出した。なほ

その上、右上の糸切歯に金が被さつてゐた。普通は、糸切歯が虫に腐蝕されることは極めて稀であるが、彼女は最先に糸切歯をやられたのである。彼女にとつてはそれが遇然の天恵であつた。美はしい歯並の奥からびかりと黄金色に光る糸切歯は、彼女の微笑みに云ひ知れぬ魅力を與へてゐたのである。それは兎も角として、糸切歯から一枚飛んで奥の下歯が、以前から虫に蝕されてゐた。時々痛み出すこともあつた。然しいつもすぐによくなつた。所が此度は、三四日たつても痛みが止まなかつた。あの晩からよ、と彼女は私に云つた。私は冷りとした。そして無理に歯醫者へ通はした。

歯醫者の言葉に依れば、その虫歯は可なりひどくなつてゐるので、セメンをつめ金を被せるには、二週間餘りかゝることだつた。その間彼女は、初めの一週間は毎日、後の一週間餘は一日置きに、文字通り神経をすりへらす手術を受けなければならなかつた。神経質な彼女はそれを非常に苦にした。出かける時には、

つまらない用事に愚圖々々こだはつて、なるべく時間を後らさうとした。歸つてくると、眉をしかめながら碌々口も利かないで、數時間ちつとしてゐることさへあつた。それから、非常に上機嫌になつたり不機嫌になつたりした。それがまた一私に反映した。

九時頃に起き上る。もう朝食の用意は出来てゐる。私は急いで朝の身仕舞をする。然しそれはごく簡單だ。歯を磨き、顔を洗ひ、時には髯を剃り、クリームを顔と頸と手先との皮膚にぬり、髪に櫛を入れる、それだけだ。然し秀子の身仕舞は中々濟まない。第一に髪を結はなければならぬ（感心に彼女は自分で髪を束ねて、決して人手を借りなかつた）。次には長い／＼御化粧が初まる。齒醫者へ通ふので殊に念が入るのだ。細かいしなやかな指先を、顔や頸筋へ蛇のやうにのたくらせながら、何時までも鏡臺の前から立たうとしない。そのうちにみさ子が泣き出す。はるは座敷の掃除やなんかでまだ手がふさがつてゐる。私は危つかしい手

付でみさ子を抱いて、家の中をよい／＼歩かなければならない。漸く秀子の身仕舞がすむ。彼女は鏡臺の前に肌ぬぎになつたまゝ、啜り泣いてる子供に乳房を含ませる。その間私はぼんやりして、椽側から狭い庭でも眺めるか、または寢床の中でざつと眼を通した新聞を、も一度讀み直すかするより外はない。それから漸く食事になる。食事が済むと十一時に間もない。秀子は急いで齒醫者へ出かける。午後は患者が込むので午前に出かけるのだ。然し随分歸りが後れることもある。みさ子が乳をほしがつて泣き出す。私の危つかしい「よい／＼」がまた初まる。子供は笑つてるかと思ふと泣き、泣いてるかと思ふと笑つてゐる。その可愛い／＼口に唇づけをすると、私の唇をちゆつ／＼と吸ふ。たまらなく可愛くなる。それでも、秀子が歸つてくると、私はすぐに子供を奪はれてしまう。「おうよし／＼」と云つて彼女は子供に頬ずりをする。私は黙つてそれを傍觀するのだ。乳母を雇はないで、自分の乳で子供を育てる彼女の氣持ちが、私にも分るやうな氣がする。

それが私を苦々しい氣分にする。そのうちにまた晝食だ。朝が遅いので、私達は晝に麵麩と牛乳とを取つてゐる。所が秀子は、齒が痛いと言つて牛乳だけを飲み、而も乳のためと云つて二合近くも飲み、そのまゝ右の頬を掌で押へて、黙り込んでしまう。私は一人で淋しく麵麩をかちる。彼女は子供をはるに預けて、長く坐り込んで動かうともしない。それから俄に、上機嫌か不機嫌か、やつてくるのだ。上機嫌な時には種々なことを饒舌る。醫者の家で逢つたごその奥さんが、こんなことを云つたとか、藝者がどんな着物を着て齒の治療に来てゐたとか、今度みさ子を連れて伯父さんの家へ行かうとか、子供があつては芝居にも行けない——それも別に不平の調子ではなく至つて殊勝な調子で——など、いろんなことを云ひ出す。いゝ加減調子を合してゐるうちに、うつかり信用出来ないぞといふ氣が私のうちに起つてくる。なせだか私は知らない。今に背負投げを喰ふぞといふ氣持が、暗々裡に私を警戒させるのだ。そして實際、その背負投げを喰ふこ

とも屢々ある。私が彼女の上機嫌に引込まれて、頑是ない子供にからかつたり、彼女の乳房を弄んで子供をいぢめたりしてると、「子供は玩具ではありません、」としまひに彼女は云ひ出す。彼女にとつては、私よりも子供の方が大事なのだ。子供は神聖な寶で、猥りに犯してはいけぬものなのだ。……然しなほいけないのは、彼女が不機嫌になる時である。私が何か尋ねても碌々返辭もしない。そして齒の手術の不愉快なことを、切れ／＼な言葉で訴へる。訴へた終りには、「みなあなたのでせいですよ、よく覚えていらつしやい、」と止めをさす。私が彼女を殴りつけたといふ事實だけが、何時までも残つてゐるのだ。二人が獸のやうに掴み合つたあの不快な光景は、彼女の頭から消え去つてゐるかのやうである。然し私の頭からは消え去らない。僅かな機縁であの光景が私の頭に蘇つてくる。そして彼女に對する反感——といふより寧ろ譯の分らない漠然とした憤懣の情が、むら／＼と湧き上つてくる。然し彼女は平然と澄しきつてゐる。最後の止めの一句を云つてし

まうと、それで安心しきつたやうに、然しまた凡てから暫く休らいたかのやうに、「少しお父さんに抱っこしてゐらつしやい、」と云ひながら子供を私の方へ差出す。「はるに抱かしたらいいぢやないか、」と私は答へ返す。一寸諍ひが起る。「あなたは子供に愛がないんだわ、」と彼女は云ふ。……あゝ、何といふ無知な言であるか！ 然し、私は彼女ほどは子供を愛してゐなかつたかも知れない。斯かゝ反目の或る時——みさ子が泣きしきるのを私が知らない顔で放つて置いた時、一寸臺所に立つて行つた秀子は、急いでやつて來るなりすぐにかう云つた。「あなた位勝手な人はない、私に怒ると子供にまで怒りなされるんだから。」私は黙つて答へなかつた。明かにその通りだつたのである。私は秀子に對して腹が立つと、子供に對してまで腹が立つのだつた。彼女に對する憤懣の餘には、子供に當りちらすことさへあつた。私はそが人の父たる態度ではないことを知つてゐた。然しどうにも仕方がなかつたのだ。……そして私に對する彼女の不満や

反感は、其處から芽すことが多かつた。

私の氣分がどうであらうと、また彼女自身の氣分がどうであらうと、彼女にとつては、みさ子は絶對的なものであつた。

「私はどんなに怒つてゐても、子供にまで當り散らすやうなことはしない！」それを彼女は矜りとしてゐた。その矜持の地點から、私を見下して輕蔑した。「あなたは私をヒステリーの的だと仰言るけれど、子供にまで當り散らす所は、あなたの方がよほどヒステリーだわ。」

然し私には、彼女のやうな感情の使ひ分けは出来なかつた。職業に對する見解の相違（その當時私は氣樂な職があつたら勤めてもいゝと思つて二三の知人に頼んでゐた）や、隣近所との交際に對する意見の衝突や、廣く道德上の議論などに於て、互のうちに不融和なものを見出す時、私はいつも陰鬱な氣分に沈んでしまつた。彼女も口を噤んで反抗的な態度を見せた。さういふ時でも彼女は、子供に對

してはにこやかに笑ひかけ、少しもわだかまりのない愛撫を示した。私は冷然とそれを見やつた。彼女は私の心を見て取つて、わざ／＼子供を私の方へ差し出したりした。それは私の氣分を和らげんがためではなく、子供を武器として私を頭から壓倒せんがためであつた。私がなほ冷然と構へてゐると、彼女は一寸皮肉な微笑とも苦笑ともつかない影を、口元に漂はせた。如何に私が反抗しても、最後の勝利は自分にあると確信してゐるのだ。それが私は癪に障つた。子供が母親の隣の上で、そして私のすぐ眼の前で、譯の分らぬ音聲を二三言發しても、聲を出して笑つても、急にわつと泣き出しても、私は平然として見向きもしなかつた。彼女も遂に我慢をしかねた。私を壓倒せんがための武器は、直ちに神聖なる寶と變つた。その寶を輕蔑したといふ見地から、彼女は私を攻撃してきた。

「あなたはこの兒を誰の兒だと思つてゐらつしやるの。まるで他人の兒のやうな態度をなさるのね。」と彼女は云ひ立てた。

「僕とお前との兒だ！ 然し……………」

私は先きを云ひ續け得なかつた。私が彼女を憎く思ふ時には、子供をも同時に憎く思ふ時であつた。彼女に對する憤懣の念を、私は子供にまで押し擴げないではゐられなかつた。秀子は一寸の隙を見て、親戚や友人の家を訪れることがあつた。私はよくその留守居の役を勤めてやつた。所がともすると、彼女の歸りが豫定よりも延びた。子供は乳を欲しがつて泣き出した。初めは、るがお守りをした。夕方近くなると、はるは食事の仕度にかゝつて、私が子守りをした。綺麗なセルロイドの風車を見せたり、護謨の乳首を含ましたり、庭に出たり、座敷の中を飛び廻つたりしたが、しまひには方策つきて、子供を泣くまゝに任せるより外仕方がなかつた。秀子は中々歸らなかつた。私は憤ろしい心地になつていつた。乳の時間も忘れて何處で遊びほうけてるのか。子供を愛してると云ひながら、子供に空腹の叫びを立てさして平氣でゐられるのか。……………私は怒りで胸が一杯にな

つてきた。そして、彼女に對する怒りで燃え立つてゐる私は、泣き叫ぶ子供に對しても、譯の分らない腹立たしさを覚えてきた。子供を其處に投げつけたくなつた。それをちつと我慢しながらも、やけに子供を揺り動かした。子供は更にひどく泣き出した。……………秀子は玄關から荒々しく戻つてくる。そして私の手から子供を抱き取る——奪ひ取る。その眼付には、遅くなつて濟まないといふ色は少しもない。子供を泣かしたことを私に責める色ばかりがある。私は黙然として、その母と子とに激しい敵意を感じる。そして、醜い反目が初まるのだつた。

然し、私は秀子に對する腹立ちをなせ秀子だけに限ることが出来なかつたのか？ なせみさ子にもその腹立ちを押し擴げたのか？ みさ子は自分と秀子との兒だと、私ははつきり信じてゐた。否それは信する信じないの問題ではなく、確乎たる事實だつたのである。それなのに、なせ私はみさ子を……………さうだ、秀子と自分とを對立させて見る場合に、みさ子を秀子的一部分だとして感じたのか？

うして感ずるやうになつたのか？

育兒は女の最も大なる務めだと云はれてゐる。そしてそのことに、私は實生活に於てぶつかつたのである。みさ子の出産後七十日ばかりたつてから、私は秀子へ向つて彼女のだらしない様子を軽く難じたことがあつた。その時彼女はかう答へた。

「御免なさい。……でも、子供を育てる骨折りに、男つてもものは案外思ひやりがないものね。」

それが初めだつたのだ。

秀子の妊娠中は、妊娠といふことに免じて、私は凡てを彼女に許してやつてゐた。そして分娩といふことに對して、敬虔な恐れと尊敬とを懷いてゐた。彼女も一種の神秘的な氣持ちで、精神を緊張さしてゐた。そして分娩といふ不思議な危急な輝かしい一點を見つめてゐる私達二人の心持には、何等の疎隔も存しなかつた。

そのまゝで時が経過していつた。愈々の時機がやつて來た。私は彼女の枕頭に坐つて、彼女の兩手を握つてゐた。二人の心は凡て、握り合つた手の中に籠められた。そして偉大なる産みの力……而も案外安々と胎兒は生れ出た。私の眼からも彼女の眼からも、熱い涙が并り出た。何といふ嵩高な感激だつたらう！

所が、分娩の感激を通り越してから、私達の心は異つた方向へ外れ初めたのである。赤兒に對する私の恐れは、赤兒の發育と共に愛に變つてき、産褥に在る彼女の身心も、無事に肥立つてゆき、そして産後六十日ばかりにして、私達はまた健全なる夫婦として顔を合せた。然し豫期したやうな生活は、私の前には展開せられなかつた。

否、私は初めから、新たな生活を豫期してはゐなかつたのだ。私が頭に描いてゐたのは、昔の生活そのまゝだつたのだ。私は生活を更新することを考へないで、秀子の妊娠によつて中斷せられた古い生活の復活のみを、考へてゐたのである。

—理想の女—

分娩の後に育児といふことが横はつてゐるのを、私は勘定に入れてゐなかつた。私は私の全部を以て彼女に對しだした。そして彼女も彼女の全部を以て私に對してくれることゝ、豫期してゐた。その豫期が凡て裏切られてしまつたのだ。子供が居るから」といふことは、彼女の最後の而も至當な口實だつたのである。

二人で郊外へ散歩にゆき、または音楽などを聴きに行く——二人の生活を純化し向上するもの——それが殆んど出来なくなつたことは、私も別に憾みとはしなかつた。私が夜更かしをしてゐるのに彼女が早くから寢てしまうこと、子供の守りや何かで私の時間が非常につぶされること、それらを不満だとは私も別に思はなかつた。然し私が堪へ難く思つたのは、生活の凡てが子供によつて規定されること、子供を中心にして割り出されることであつた。

夜寢床の中にはいつて雑誌を読みながら、餘り煙草を吸つてはいけなかつた。煙が室の中に籠ると子供に毒だつた。雑誌の頁をめくるのにも、なるべく静にしな

ければならなかつた。——夜遅くまで大聲で話してはいけなかつた。家の中で友人と談じ且つ飲みながら夜更しをするなどは、殊にいけなかつた。八時過ぎになると、私は自分の書齋に退いて、寄宿人みたいな態度を取らなければならなかつた。——子供が眠つてゐる時には、爪先でそつと歩かなければならなかつた。戸棚の抽出を開けるにも、襖を閉めるにも、皆遠慮がちに力を抜いて徐々にやらなければいけなかつた。——夜遅く歸つて來ると、宛も盗人のやうに足音を偷んではいつて來、こそ／＼と表の締りをしなければならなかつた。——やたらに嚏をしてはいけなかつた。もし風邪でもあると子供に傳染するからであつた。——湯には晩にきりはいれなかつた。子供を湯に入れるには、私と秀子と二人が、りでなければならなかつたし、晝間子供を湯に入れると風邪をひく恐れがあつたし、私共と女中と三人の家内では、朝から晩まで湯を沸しとくのは贅澤すぎるからであつた。——私は少し収入の道を講じなければならなかつた。一人子供が出來て

—理想の女—

見ると、これから何人出来るか分らなかつた。それを考へると、私が父から受け継いだ財産だけでは少し不安だつた。私は安樂な就職の口を二三の友人に頼んだ。^{幸にも}思ふやうな所がなかつた。それで、文學をやつてる友人の紹介で、或る翻譯を少しづつやりだすこととなつた。——友人以外の人々と應對する時には、少しく行儀作法に注意しなければならなかつた。私はもう書生つぽではなく、一個の父親だつたからである。——其他種々。

子供に代つてそれらのことを規定し割り出すのは、皆秀子自身だつた。私は子供のためといふ名に於て、出来る限りその命に服従した。而もその子供たるや、誰の兒であつたか！……否、子供は勿論私と秀子との兒であつたが、結局は誰の所有であり、誰の領有内の者であつたか！

二月三月とたつうちに、まる／＼と肥つてくるうちに、子供に對する私の愛は俄に深くなつていつた。餅のやうに滑かな肌、深くくびれた手足、絶えず小さな

黒い！

すねのトリ。

くまこ
安月給の由。

舌をちら／＼覗かしてゐる眞赤な唇、笑ふ度に見える片頬の鬢、眞黒な濡んだ眸、澄み切つた青い目玉、いろんな澁め顔や笑ひ顔、何とも云へない乳の匂ひ、日の光りに透し見ると、あるかなきかの金色の産毛、しなやかな髪の毛、……それを見ていると、私は自分の胸にちつと抱きしめたくなるのであつた。そして、如何なる場合をも構はずに子供を抱き取り、また如何なる時をも構はずに子供の頬へ唇を持つていつた。然しさういふ氣持ちは、長く持續するものではなかつた。三十分も子供を抱いてゐると、私はすぐに母親へ返したくなつた。嫌がるのを無理に子供の頬へ唇をあてゝゐると、やがてふいとその側から離れたくなつた。

私はかういふ愛し方を、單に氣まぐれの愛し方だとは思はなかつた。母親の愛を漫性の愛だとすれば、父親の愛は急性の愛だと思つてゐた。然し秀子から見ると——漫性の愛に浸り込み、半日でも子供を抱き續けて飽きもせず、傍から大事さうに眺めて楽しんでゐる、秀子から見ると、私の愛はでたらめな危険なものだと思

はれたかも知れない。却つて子供を苦しめるものだと思はれたかも知れない。そして、それに彼女のする性質が更につけ加はつたのである。する性質だといふのが悪いならば、子供を自分一人で所有したいといふ母性の本能的な策略なのだ。

私が子供の頬へ自分の頬を持つてゆく。すると、刺り立ての髯を押しつくるのは痛いからお止しなさい、と彼女は云ふ。——私が子供の口へ自分の唇を持つてゆく。すると、そんなことをすると乳を飲みたがつて困る、その上子供が嫌がつてるではありませんか、と彼女は云ふ。實際子供は私の唇をなめて、嫌な澁め顔をしてゐる。——私は子供を抱き取る。抱いてるだけでは満足しない。子供の眼をいちり、小鼻をいちり、頭を撫で廻す。しまひに子供はむづかり出す。そして結局、母親から子供の機嫌を直して貰ふか、または子供の機嫌が直つてももう抱いてゐるのが嫌になるかする。子供を玩具にするのは止して下さい、と彼女は云ふ。……彼女の云ふ所は凡て道理である。私は黙つて引込むより外に仕方がない。

然し、引込んでる私を此度は彼女の方から追求してくる。一寸便所に行つてくる間、一寸手紙を書く間、抱いてゐて下さいと云つて子供を私に預ける。然し便所から出て來ても、手紙を書き終へても、子供を抱き取らうとはしない。私は嫌になつて無理に彼女へ渡す。すると、あんなにいつも抱きたがつていらしたくせにと彼女は云ふ。そこで私は二重に封じられてしまうのだ。……封じられた私は、おづ／＼と子供の方を窺ふ。子供は母親の膝の上で乳を飲んでゐる。私は其處に近寄つて、乳房を含んでる可愛い口元に見とれる。さういふ私の様子を見て、彼女は慢らかな皮肉な笑みを眼付に浮べる。それでも私は幸福なのだ。そつと手を差出して、子供の頬邊や乳房を指先でつゝいては、少しからかつてやりたくなくなる。しまひには、子供の顔と乳房との間に、いきなり自分の顔をつき込まうとする。柔かな肌と温い乳の匂ひ！すると私の頭は強く押しつけられる。「少し待つてゐらつしやい、今飲み初めたばかりだから、」と彼女は云ふ。私は傍からおとな

しく二人の様子を見守る、否それは二人ではなくて一人である。子供は彼女の一部分なのである。私は犬が主人の手先を待つやうにして、彼女の一部分たる子供が私の愛撫に許し與へられるのを、其處に屈み込んで待つのである。

斯くて私はいつのまにか、子供に對する権利を凡て、彼女に奪はれてしまつたのである。而も彼女はそれのみに満足しないで、家庭内のあらゆる権利を奪はうとした。

子供が出来ない間は、女中は少くとも、彼女の女中でありまた私の女中であつた。然しそれも何時の間にか、彼女の女中となつてしまつたのである。

私は夕食の時に、時々酒を飲んだ。そして可なりいける方だつたので、その時の気分によつては三合位飲むこともあつた。自宅で三合飲むと可なり酔つた。酔ふと子供に戯れたい欲求が——彼女の所謂不條理な子供いぢめの欲求が、更につのるのであつた。彼女はそれを嫌つた。そしてなるべく晚酌の量を少くしやうと

した。私はそれに對抗して云ひ張つた。彼女もしまひに我を折つて、では少しと云ひながらはるに爛をさした。所が持つて來られた銚子の中の酒は、餘りに量が僅かだつた。私は更に爛を命じた。すると、「まだあつたかい」と秀子が尋ねることもあつた。「もうおしまひでございます」とはるが先に云ふこともあつた。そして二人はちらと目配せをした。私はそれを見落さなかつた。酒がまだあることをも知つてゐた。然し彼女等二人の間には前から相談が出来てたのだ。私はもうどうすることも出来なかつた。——私は煙草が非常に好きで、夜更しをしてるうちに困ることがよくあつた。それでいつも紙巻は一箱づゝ買はして置いた。所が一箱の煙草が非常に早く無くなつてしまつた。私は驚いて少し節制しやうと考へた。秀子も常から煙草の害を説いてゐた。然し俄に量を減することも出来ないの、私ははるにまた一箱買ふやうに命じた。所がその一箱は中々買はれなかつた。そして古い箱の中に、もう空である筈の箱の中に、二袋か三袋かの煙草がいつもちやん

と並んでゐた。それも策略だつたのだ、秀子とは、二人でした策略だつたのだ。私はいつのままにか、意志の上での無能力者として取扱はれてゐたのだ。……さういふことが相次いで起ると、私は自分の云ひ付けがはるに少しも徹底しないやうな不安を感じだした。私の命令は、途中では、と秀子との商議に上せられ、そしていゝ加減に勝手に取計らはれるらしかつた。この不安が次第に私の頭へ深くはいり込んできた。そして遂には、はるに用を頼むのも遠慮しがちになつた。何たる馬鹿げたことであつたか！

斯くて私は子供を奪はれ、女中を奪はれて、孤立の自分を見出したのである。そして私の孤立を更に決定的なものたらしめたのは、私に對する秀子の態度であつた。彼女は子供を中心にして家庭内のあらゆる機關を立て直し、あらゆる権利を手中に收め、そして子供の名に於て私に服従を求めたのである。私は服従せざるを得なかつた。服従した上に、種々の氣兼ねをしなければならなかつた。彼女

の方には育児といふ正常な武器があつた。私の方には無職といふ弱點があつた。友人の紹介で得た翻譯の仕事も、氣乗りがしなくて放り出してゐた。然し徒食してゐるのではなかつた。その頃私は未來の文明批評家を以て自ら任じ、種々の研究を試みてゐた。然しさういふ當もない机上の勤勉は、彼女の眼には大した價値も持たなかつたし、また文明批評家といふ言葉の意味が空漠たると同じく、私の頭も空漠たる境地を彷徨して、何等確乎たる地盤をも有しなかつた。彼女は私の未來を頼りなく思つたに違ひない、私自身も實は餘り頼り多く思つてはゐなかつた位だから。さういふ不安から彼女は自分の方に責任を感じだし、自分の全權で家庭を立て直さうとしたのかも知れない。そして私を支持してゆくことを考へな

いで、子供を守り育てることをのみ考へたのかも知れない。然しさういふ誤つた考へは、まだ第二義的のものに過ぎなかつた。根本の問題は、彼女の精神の据ゑ所にあつた。彼女はもはや進むといふことを知らなかつた。そして現在の儉安を

のみ事としてゐた。

女の退歩は、家庭の主となる所から、主婦として安住する所から、初まる。結婚し、子を産み、家庭内の権利を掌握する、其處から初まる。私はそれを知らなかつたのだ。それを適當に導くことを知らなかつたのだ。そしてたゞ、彼女のどつしりと落付いたお臀に對して、苛ら立つばかりだつたのだ。

秀子の心は殆んど子供にばかり向いてゐた。私が何か用を頼んでも、それが満足に果されることは少なかつた。私は夜遅く珈琲を飲む習慣があつた。秀子が珈琲をいれてくれないと、私の方から催促するのであつた。彼女は子供に添寢をしてゐたが、「はい只今」と答へたきり、中々立ち上らうとしなかつた。暫く待つて見に行くと、彼女はいつしか子供と共に居眠つてゐた。私は腹が立つた。彼女を揺り起して責めてやつた。彼女は「済みません」と云つた。そして顔では笑つて居た。私は更にその鐵面皮を責めたてた。彼女は子供のことで疲れてゐるの口

實にした。そしてかう答へた。

「はるにさしたらいゝぢやありませんか。私ばかりを使はなくつたつて……。」
私は聲を荒らげないではゐられなかつた。彼女の方にも私の反感が感染していつた。一度爭論を初めると、問題は擴がるばかりだつた。醜い反目が生ずるばかりだつた。

初めからはるに頼むつもりなら、私はわざ／＼秀子に頼みはしない。夜の珈琲一杯が私の氣分に如何なる意味を持つてゐるかは、彼女も知つてゐる筈だつた。私は彼女の全部で私に仕へて貰ひたかつた。私の方でも、私の全部で彼女に臨んでゐた。然し彼女は私の方へ背中を向けて、子供の方へ向いてゐたのである。私はそれが不満だつた。私に對する彼女の愛情が疑はれた。疑はれた。

彼女は私に對して、殆んど愛情の直接な表現を見せなかつた。愛情を見せる場合には、多くは子供を通じてゐあつた。「あなた」といふやさしい二人稱は、「お父